I love boring life

kyoji

1-1

　まずは定義を述べよう。土台がしっかりしていないと、うえに積み重ねた一切は無駄なものなのだ。
『植物系男子とは、草食系男子を超越し、もはや女性を求めることがなくなった男子を指す言葉である』
　こう書くと何やら誤解されるかもしれない。女性を求めないからといって、では触手がべつの性に向けられるのかと言われたら、もちろんそんなことはない。じつに気色悪い。腐女子と呼ばれる連中が喜びそうだが、それは彼女たちを見下した言い方になってしまうので訂正しよう。彼女たちは無節操に無差別に男同士の配合を楽しんでいるわけではないだろう。対象とされるのはおそらく美男子だけだ。さておき、俺は単に女性を求めないのだということが言いたい。
　草食系男子と呼ばれる輩は、内心では女性を望んでいるが自分からアプローチするガッツを持たないチキン野郎の集合である、と定義してみたが、何やらとてもひどい言葉で装飾されてしまった。しかし俺は彼らを責めているわけではない。ただ事実を述べただけだ。さらに言えば、ひっそりと女性を望みながらいつか誰かが自分を世間のサファリから見つけ出してくれるとなかば本気で信じている点がじつに醜い。たまごの腐臭ほどに、ティッシュの空き箱ほどに、不愉快な奴らだ。やはり責めているかもしれない。
　しかし彼らにも見所はあると俺は考える。なぜならきちんと興味の対象を持っているからだ。ひとしきり馬鹿にした草食系男子のいいところとは、女性に対する気持ちがじつに清純であることだろう。では肉食系男子は不純なのかときかれたら、俺はイエスと答える。偏見かもしれないが、草食系男子のほうが女性を大切に扱おうとする気持ちが強いはずだ。そんな彼らに女性が寄ってこないのは哀れなことだが、自分たちのアプローチ不足が招いたことなのだから、優しく手をさしのべてやる必要はない。ただ事実を突きつけて、「お前らのような希望は抱くが消極的な低空飛行の輩には同情の余地もない」と断言することが、唯一の優しさだろう。
　そんな優しい言葉を直球で投げかけてやれる俺は、肉食にも草食にも属さない第三の分類、植物系男子である。女性を求めないのは前述したが、それだけではない。一切のことに対して興味関心が薄いのだ。まったくないのかと言われたらそんなことはない。そんな奴がいたら人間ではなくただの植物だろう。いやそれでは植物に気の毒だ。植物だって受粉しなければ繁殖できないのだから、周囲に対して興味関心があるはずだ。ただ、それがじつに薄弱であるというだけの話だ。
　これは、植物系男子たる俺が、ささいな関心事を拾い集めて紡いでいく、じつに線の細く味気ない、だがしかし、肉食や草食では味わえない物語である。

1-2

俺が在籍する大学は、京都の松ヶ崎という土地にある。一応市内だが、華やかな地域からはずいぶん離れており、唯一の華は北山通りが近くに通っていることだ。北山通りは京都市を東西に走る最北端のおしゃれ通りである。断言しよう。これより先、北に行っても何もない。もちろん家屋や公園や宝ヶ池くらいならあるだろうが、どれもわざわざ足をのばして立ち寄るような場所ではない。一方北山通りには、小洒落た家具店や小粋な古着店、京都ではわりと有名なケーキ店などがあり、地方からやってきたカントリーな大学生たちを誘い込む甘い餌となっている。

ちなみに俺はこれら店舗に惑わされた経験はない。京都生まれだし、有名ケーキ店のケーキはおみやげなんかでしょっちゅう食べていたし、これは関係ないかもしれないが、俺が生まれた産婦人科医院は北山通りにあったのだ。関係ないな。つまり、俺にとってはどれも無用のものだということだ。何が楽しくてあんなところに顔を出すのか理解に苦しむ。ものがいっぱいでせせこましくて、人よりも商品のほうが大事だと考えている店員の管理下に置かれるなんて、俺はごめんだ。

うちの大学は理系の学部しかないからというわけではないだろうが、学内はじつに殺風景だ。入口すぐのところにそびえ立っている意味不明にカラフルなモニュメントを除けば、色合いはダーク寄りのトーンで統一されている。じつに薄気味悪い。

生協食堂はまるで刑務所のそれのようだ。刑務所の食堂に行ったことはないが、この暗い空気とさらに暗い学生の顔はそれに相応しいだろう。俺もよく利用するが、あまりに陰気な雰囲気が嫌になって以来、天気のよい日は外のベンチで食べることにしている。

校内を行き交う人びとは皆どことなく雰囲気を纏っている。どういう雰囲気かは説明しにくい。ひとむかし前の大学生の雰囲気だという説明がもっとも近い気がするが、それも正確ではないだろう。服装はまともな奴からもはや白くない白衣姿の奴まで多岐にわたる。

噂に聞いたところによると、うちの大学は全国でもっとも女子数の多い理系大学らしい。理系大学とはつまり、法律や文学を学べる学部がない大学という意味だ。たしかに校内を歩く割合は男女半々ってところだろう。しかし噂を流した奴は研究室に引きこもっている野郎どもを数に入れていないのではないだろうか。奴らをカウントして改めて結果を見たら、なんと華のない大学なのだろうという正しい感想が得られるはずだ。

俺は高分子機能工学課程というところに籍を置いている。高分子ってなんだ？　とよくきかれるが、分子量一万以上の分子のことだと説明しても理解してもらえることは非常に少ない。むしろ彼らが知りたいことは、何を勉強する学科なんだ？　ということだろう。そう推測した俺は、以来きかれるたびに「服の繊維の研究だ」と答えることにしている。実際のところはどうなのか知らないので適当に答えているだけなのだが、それで納得してくれる不勉強な奴らが多いのは事実だ。

毎日学校には行っているが、やることといえばなんのことやら理解不能な講義を聴講したりレポートの書き方を学ぶだけの内容のない実験をするだけで、まったくなんのためにここにいるのかわからなくなってくる。じつに味気ないものだ。

空き時間には校内をあてもなくうろついたり、大学近くを流れる高野川沿いにあるショッピン

グモールの本屋で立ち読みをするくらいだ。大学生というのは時間を有り余らせているとよく言うが、これはじつに本当のことである。蟻よりも働かず、川の流れよりも退屈で、赤ん坊よりもよく眠る人間が大学には集い蠢いている。

1-3

ここで俺自身の現在までのいきさつについて語ろう。

中学高校となんとなく近隣の公立に進み、気がついたら理系人間になっていて、特に目標も立てずに目の前にある勉強を次々とこなしていくという、まったく世間の九割が謳歌しているだろう華やかな青春とはかけ離れた勉学の道を歩んできた。高校三年になっても、やりたいこと、なりたいものが見つからなかったのは特に探していなかったからだが、それでも何かしらを選択しなければいけない差し迫った状況に追い詰められ、俺は現在の大学を選択した。何かしらこの大学が俺を惹きつけるものを持っていたのかときかれたら、答えはイエスだ。それは家から近いこと、国立で学費が安いこと、二次試験に物理がないことだ。俺を縛っていたものは家の都合による学費の件のみで、あとは何をどう選ぼうが俺の自由だった。金がないのなら家から出ないほうがいいと考え、国立なら学費が安いと考え、二次に物理がないなら俺でも受かると考えた。じつに合理的な思考だと自分では感心しているのだが、人に話すとどうにも妙な表情をされるので嘆かわしい。どこが気に入らないのか。どこに問題があるというのか。

入学した当初は、俺もそれなりに気持ちの高ぶりを感じていた。大学生活というものに対して憧れに似た感情を抱いていたと言っても嘘ではない。その全貌が掴めずぼんやりとしていたので、これからそれが明らかになるという点に興奮していたのだろうと、俺は分析している。

大学生活の実態が明らかになるにつれて、俺の興奮によって湧き立った熱は徐々に落ち着いていった。いや落ち着くというのは正確ではない。もっと、急速冷凍に近い速度で冷めていったというのが正しい。

まずはじめて出席した講義で俺の心の熱は十度近く下がった。理由はきちんとしたものだ。講義が長すぎるのだ。きちんとした理由ではないではないか、と反論する奴はおそらく講義を聞いていなかったのだろう。俺は熱心に耳を傾けていたのだ。どちらがまじめでどちらが要領がいいかという議論は不要だ。結果からすると、聞いていなかった奴らは大学生活をおおいに謳歌し、聞いていた俺は大学生活に見切りをつけた。見切りをつけるのが早すぎるという議論も可能だが、俺はそんな声に耳を傾けるつもりはない。大学講義よりもつまらないことになるのは必至だろう。

突然の休講も俺の心を冷やした。せっかく朝早くから出かけてきたのに、掲示板の連絡ひとつで時間を潰されてはこちらの立場はどうなる、と主張したい気持ちに熱を持っていかれてしまったのだ。そんな主張はどこにぶつけても門前払いが目に見えているので、やり場のない怒りは俺の中でわだかまり、しだいに諦めがよくなってさらに心の熱が下がった。あとで知ったのだが、携帯から当日の休講状況が確認できるらしい。しかし、時すでに遅し、俺の心は氷が融解しない程度に冷めきっていた。

とどめが大学校内を楽しそうに練り歩く連中の姿だ。彼らは要領がいいのだろう。講義に適当に出席し、単位だけを勝ち取り、残る時間を楽しいことでいっぱいに埋めているに違いない。だからあんな殺伐とした校内でも表情にぱっと花を咲かせられるのだろう。

そういったマイナスの気持ちを育み、熱を下げながらすごしたおかげで、現在の俺はすっかり意気消沈、やる気のかけらもなくただ大学内を徘徊するだけの永久機関のたまごと化している

のだ。

　このように書くと、まるで俺が誰からも存在を忘れ去られ、まさに道端の草花と化しているのではないかという印象を与えかねないが、じつはそんなことはない。
　新入生の立場を経験した奴なら誰でもわかると思うが、四月に校内を歩いているとものすごい頻度で声をかけられるという事実がある。これは四条木屋町でキャッチに遭う頻度よりも高い。声をかけてくるのはもちろん派手な半纏を纏った野郎どもではなく、大学生だ。しかし胡散臭さでは似たり寄ったりである。
　かくいう俺も、新入生の頃は校内でキャッチされまくった。「君、新入生？」ときかれ「はいそうです」と答えたらしばらくは捕まってしまう。うまい断り方を身につけるにはもってこいの環境だが、それでも大学を出てから詐欺に遭う奴がごまんといるのだから不思議な話だ。
　はじめは調子よく答えて相手に合わせていたのだが、しだいに鬱陶しくなってくるもので、こんなにイライラさせられるのなら、もう無理やり切り上げてしまおうと思い立った。俺はぺらぺらと軽快に話す先輩にばっとストップをかけてこう言った。
「俺、入ります」
　相手が話しかけてくるのは、つまり自分たちのコミュニティに参加してもらいたいためなのだから、その原因を解消してやればべらべらと長ったらしいおしゃべりが止まると考えたのだ。しかし一時の自由のために契約を結んでしまっていいのかという疑問が誰の頭にも浮かぶだろう。俺の頭にだって浮かんでいた。だが、気に入らなければやめればいいのだ。さらに、気に入らなかったとしても、よくよく考えてみればアドバンテージのほうが大きいことに気づくだろう。サークルに入れば、そこには先輩がいる。大学では先輩からもたらされる情報というものは、じつに重宝するものだ。わかりやすいところでは試験の過去問である。先輩を持たない新入生は過去問の調達に苦労するのだ。同じ学科のサークル無所属の奴が言っていたことを参考にしている。
　ここで少し文系の人たちのためにはからっておくと、理系の学部では当然のように試験がある。文系ではレポートなどで大半が済んでしまうかもしれないが、俺たちはそうはいかない。きちんと勉強しないと先へ進めないことになっているのだ。だから、過去問の調達は文系が思うより重要なミッションなのである。
　こんなふうに書くと、少し文系を馬鹿にしているように思われるかもしれないが、断じてそんなことはない。ただ、俺の文系の解釈は一般的ではないかもしれない。自分では納得がいっているので訂正する気はないのだが、不快に思う人がいれば謝るべきだと考えている。
　俺の解釈では、文系とは理系にならなかった、あるいはなれなかった人たちの集合であると見なしているのだが、どうだろうか。つまり、もともと系統は理系のみで、そこに入らないあるいは入れない人たちが文系と名乗っているのだという考え方だ。なぜこのように捉えているのかというと、俺には文系が意味するところがはっきりと見えないからである。だって理系は数学科学に強いが、文系はどうなのだ？　文学やその他それらしきものに強いのか？　文系の大学に行っている人間はいったい何を学んでいるのだ？　その説明や理解が自分のなかで構成できないから、あえて理系の補集合というかたちで文系を捉えているのだ。

話を戻そう。俺がサークルに入ったというところである。俺が選ぶわけでもなく選んだのはクラシックギターサークルだった。毎日部室や空き教室に集まっては練習に励み、定期的に演奏会にも出席するというじつにきちんとしたサークルだ。わけのわからない、まったく不利益で不愉快な闇サークルとは雲泥の差である。

しかし先にも述べたが、俺がこのサークルに入るといったのはその場を逃れたい一心のためであり、ギターになど興味はないし、演奏会に出席するなどもってのほかである。

そこで俺が考えたプランはこうだ。とりあえずかたちだけサークルに籍を置き、人のつながりを築く。そして過去問の入手経路を確保したうえでさらりとドロップアウトするのだ。じつに合理的かつ現実的な花丸先生満点ですよ、のアイデアである。

1-5

　ある日、講義の聴講を終えて、俺はサークルの部室を訪れた。一度顔を出せと言われたためである。時間潰しにもなるのでちょうどいい。
　大学の部室棟はプレハブみたいな二階建ての建物で、薄っぺらく横に長い。関取十人で突き押せば、ぱったりうしろに倒れるのではと思わせるほどに脆弱であった。俺は一階右端のドアをノックした。
　なかから「どうぞ」という声が聞こえた。ドアノブをひねって手前に引く。
　室内は散々たる環境だった。ギターケースが高く積み上げられた部屋の一角は、近づいたらケースの雪崩に遭って埋もれてしまいそうな危うさがあった。棚がないため楽譜などの書類が床に散りばめられていて足の踏み場もない。隙間からのぞく畳はところどころ腐っていて何やら不快な空気が部屋を支配していた。
　部屋の中央にあぐらをかいてギターをジャンジャンしていた女を俺は見たことがなかった。新入生勧誘のために動き回ってやかましい言葉を醜い口から吐き出し続けた先輩らしき男はここにはいない。
「何か？」俺のほうを見ないで女は言った。
「新入生なんですが、先日勧誘を受けてここに来いと言われたもので」
「勧誘なんてうちはしないけど」
　不可解な女の発言に、俺はきょとんとしてその場に立ち尽くした。どういうことだ？
「ここはクラシックギターサークルですよね？」おずおずときいてみた。
「いや違うけど」
　いや違わない。表のドアのプレートに「クラシックギター」と拙い文字で明記されている。なんだ、この女は？
　関わると面倒なことになりそうな直感が俺のなかを駆け抜けた。サークルは諦めよう。というより、これでいい口実ができた。かたちだけでも部室に顔を出したし、その場にいた妙な女と関わり合いになるのが嫌だったので入会を諦めたという言い訳は意外と説得力があるだろう。なぜなら俺がそれで納得しているからだ。人とのつながりはまた考えればいい。俺ほどの頭脳なら妙案のひとつやふたつくらいすぐにポップアップするのだ。
「そうですか。失礼しました」
　ドアを閉じて身を翻し、俺は生協食堂に向かうことにした。結局女は一度も俺を見なかった。
　その後、校内のあらゆるポイントで俺は部室にどすんと座って憮然としていた女に出くわした。こう書くと何やらロマンスイベントの伏線を張っているようにとられるかもしれないが、俺はそんなピンク色の糸を張り巡らせたりしないし、第一そんなメルヘンな糸など持っていない。大学生協の購買では常時売り切れである。
　大学校内ではそのピンク色の糸が至るところに散見される。なぜかというと校内を徘徊する男子が皆不可視の糸巻きからカラカラと不快な音を立てて糸を垂れ流しているからだ。結果、校内道路や生協周辺、研究棟の階段、教室の椅子と椅子の間などにピンク色の糸が入り乱れてくんずほぐれつ、絡み合ってところどころ厄介なことになっている。すべては男が手ぐすね引いている

もので、隙あらば女子を釣り上げようと血道をあげているのだ。
　俺が行くところといえば、基礎講義が行われる棟の教室、実験室、生協食堂と購買などだ。その女は俺と同じ学科ではないはずだが、頻繁に顔を見かける。相手は常に俺を見ないので、俺だけが意識していることになる。何しろ向こうは俺の顔すら知らないはずだ。
　意識しているといっても、生協食堂のメニューが更新されたというニュースよりも関心は薄い。このあたりが立派な植物系男子たる所以である。俺には自分が完全な植物であるというまったく無駄な誇りがあるのだ。
　生協のメニューが何度も更新され、生協カードがようやく仮カードから本物にランクアップしたあたりで、俺の謎の女に対する関心はすっかり息を潜めて所在すらわからなくなっていた。

2-1

そろそろ大学施設のなかのどこに何があるかを覚えはじめた六月下旬のことだった。

どんな奴でもクラスにひとりは友達ができるだろう。稀になぜか孤立してしまう哀れな奴もいるが、そういったバグのような連中は一般論を語るにあたり、頭数に入れる必要はない。誤差が生まれてしまうからだ。

俺の場合、むかしからまわりに人が勝手に集まってくる。頼みもしないのに、無作法に俺のパーソナルスペースを侵し、俺を囲んでくる奴らはまるで密に群がる蜂のようだ。自分がそんな甘い香りを発しているという自覚はないのだが、どういうわけか、人を集めてしまう。そういう星の下に生まれてしまった、と納得したのは小学生の頃だ。

集まってくるのが主に男であるという事実は不快以外の何ものでもないが、男だという理由で拒絶するのもさすがに気が引ける。本当は気など引けず、拒絶するのが面倒なだけなのだが、こう言ったほうがお人好しの好青年をアピールできるかもしれない。だが集まってくるのなら、男よりも女のほうが好ましいという気持ちに嘘偽りはない。これでは植物系男子といえないのでは、と思われるかもしれないが、それは間違いだ。例をあげるとわかりやすい。誰だって、傍に置くならぐにゃぐにゃしたウナギ野郎よりもかわいらしい子猫がいいだろう？　「猫アレルギーなんです」という輩は肌荒れになってしまえばいい。つまり、興味関心が薄いにしても、ある程度の好みというものが俺にもあるのだ、ということが話の要諦だ。

さておき、大学でも例に漏れず俺のまわりに男が集まるようになった。同じ学科の連中で、あからさまな草食系男子だ。顔もスタイルも平均以下。女子との交際経験もあるようでないような奴らばかり。そのくせシモへの興味関心は人並み以上でじつに男臭いのだから性質が悪い。即座に叱りとばしてやりたいところだが、泣かれてしまっては面倒なので適当に合わせることにしている。

俺に群がる連中と適当な関係を築き、一緒に昼食をとったりベンチで他愛もない話に花を咲かせたりするようになり、大学生活も最悪ではないと思い直していたある日。灰皿のあるベンチで連れと三人で煙草を吸いながらのんびりしていると、俺の手元が突然日陰になった。

見上げると、そこには陽射しを背中に浴びて不快そうな表情を浮かべながら、いつかの女が立っていた。ベンチに座る俺を見下している。

改めて観察すると、なかなか美人だ。いや、かわいいといったほうが正確だろうか。ショートのブラウンヘアは錯覚かもしれないがごわごわ動いているように見える。少し気持ち悪いが、風に撫でられて揺れているのだと捉えれば絵にならないことはない。目元はすっきりとしていて唇のかたちも美しい。服のことは何もわからないので描写できないが、京極の商店街に似たような格好をした女が二百人は歩いているのでは、というようなありきたりで見飽きたアウトフィットだった。

何かを我慢しているかのように口をもごもごさせながら俺に陰を落とし続けるものだから、俺が「用事は何だ」ときこうとして、口を開けろと脳から命令を送った直後だった。

両脇に座っていた連れがすばやく立ち上がり、俺の両腕を掴んで強引に立たせた。されるがままにベンチから腰を上げながら、「なんだお前ら気色悪い」と視線にメッセージを込めて送って

やると、ふたりともじつに妙な顔をしていることに気づいた。首を明後日の方角に激しく振って何かを伝えようとしている。そんなに必死にならなくても俺にはわかる。というか誰にでもわかるだろう。わからないのはその理由だ。
　無言で立ち去る直前、俺は女の顔を見た。今度は怒ったような表情だ。当然だろう、俺たちはあからさまにこの女を避ける行動をとったからな。しかし俺に怒るのは筋違いというものだ。怒りの矛先は連れふたりに向けてほしい。あるいは避けられるような要素を持っている自分に突き刺してはどうだ？
　充分に離れたところまで移動し、俺は灰皿に煙草の灰を落とした。
「おい、あれはなんだ？」当然の疑問を連れにぶつけた。
「お前あいつが誰か知らないのか？」ひとりが、まさか、という表情で逆に俺にきいてきた。
「微妙だな。知っているといえば嘘になるだろうが、知らないといっても嘘になる」
「要するに知らないんだろう」
「で、誰だ？」
「あれはレイチェルだ。やばい女だって有名だぞ」
　またひとつ当然の疑問が頭に浮かんだ。レイチェルだと？
「どう見ても日本人にしか見えないが。第一うちの大学の留学生はアジア系の奴しかいないんだろう？」これは俺がアジア系の奴しか見かけたことがないから言うのだが。レイチェルって名前がどこの国のものか知らないが、たぶんアジアではないだろう。
「留学生云々は知らんけど、あいつは日本人なのにレイチェルって呼ばれてるんだ」
「なんでだ？」
「自分をそう呼べって各方面で言いまわってるらしい」
　わけがわからない。レイチェルって女も。その説明をする馬鹿な連れも。
　詳細をたずねるための努力が億劫になり、俺は煙を吐き出して煙草を灰皿に投げ込んだ。水が入っているので、じゅっと音を立てて火が消える。
「さて、今からどうする？」俺は話題を変えた。
「何が？」
「今日はもう講義ないし、ヒマなんだ」
「じゃあまたやるか」
　むかしの大学生は三大道楽として「酒」「煙草」「麻雀」に勤しんでいたらしいが、現在の大学生は違うなんて誰が言ったのだろう。俺は麻雀で連れを叩きのめすことにささやかな楽しみを感じている。吹けば飛ぶようなささやかさだが。
　俺たちは駐輪所へと向かう途中、先ほどまでいたベンチを通りすぎた。そこには誰もいなかった。

2-2

　はじめての試験は、連れから入手した過去問が大活躍して俺は無事に乗り切ることができた。まだ結果は出ていないが、おそらく問題ないだろう。しかしあれほど似通った問題が出てくるとは驚きだ。大学受験のために解いていた入試の過去問と本番試験の問題がまったく別物だったという経験をした俺が言うのだから説得力があるだろう。数学と化学の問題用紙を開いたときの驚愕は相当のものだったが、無事合格してこのキャンパスの地を踏んでいるのだから、万事は意外とうまくいくものだ。

　試験がすべて終わったのは八月に入ってからだった。当然の感覚として八月は夏休みであるという確信が俺にはあったので、最後の試験が終わったときはじつに爽快な気持ちだった。これから約二ヶ月間俺を縛るものはもう何もない。普段から何かに縛られているという気持ちはないのだが、一切が自由である休みという存在が、俺の肩の荷を下ろしてくれたのだ。

　当然のように夏休みに予定などない。これは俺が希望する予定という意味だ。不本意にも降って湧いたような面倒事はいくつかある。一番億劫なのが、五山送り火を見に行く予定だ。

　俺の家は北山通りの西を上ったところにある。「上る」という表現がわからない人間は京都に来なくていい。道に迷って人にたずねるとき、会話が成立せず迷惑をかけること請け合いだろう。しかし現代の道案内事情は亀の歩みよりも加速度的に進歩しているから、もしかしたら大丈夫かもしれない。それほどに京都の人間は優しいのだ。

　さておき、俺の家は高いところに位置し、ベランダが東を向いていて洛中を一望できる。そこから京都タワーが小さくだがたしかに見えるし、大文字の火床も見えるのだ。五山送り火は、大文字が見えればもうそれで充分である。

　しかし地方から来た知識と頭の足りない人間はそうでもない。五山なのだから五つすべて見るのが本当だと主張してやまない奴らばかりなのである。ところで点火時間の関係から、五山をひとつずつ見て回ることは不可能であると俺は思う。自転車では遅すぎるし、車は渋滞にまき込まれて移動するのがじつは一番遅い。バイクが適切であるが、それでもおそらく無理だろう。

「なら実験して確かめてみよう」

　と馬鹿な発言をしたのは奈良から来た坂本慎也という同級生だ。生協食堂の表にあるベンチで俺は煙草を吸っている。向かいに座る慎也は四時という中途半端な時間に盆にいくつも皿を載せて夕食をとっている。

　慎也は実家が自称するところの田舎であるらしく、北山通りの片側二車線道路を見て「都会ってすげえ」と発言したことは俺たちの間で小さな伝説となっている。その発言から鑑みるに、こいつの故郷の道路は牛や馬やロバが踏み固めたけもの道なのだろう。

　このカントリー出身の男は、ゼミ授業で真っ先に俺という稀有な存在に目をつけ声をかけてきた人物である。前述したが、俺のまわりには自然と人が集まる。きっかけはさまざまだが、今回はこいつが原因で俺は野郎たちに囲まれることとなってしまった。俺のそばでやかましく喚き立て、奈良女子大には鹿がたくさんいるなどというどうでもいい情報を吹聴し、奈良に残してきた浪人生の彼女が心配だと言いながら合コンなど女子を含めるイベントを次々と立ち上げるような奴だ。浮かれた大学一回生の模範例である。

　俺は煙草を灰皿に投げ入れた。
「なんでそんな面倒なことを」不機嫌な調子で言ってやる。
「いいだろ、俺全部見たいんだよ」
「ひとりで回ればいいだろ」
「道がわからんからお前もついて来いよ」
　俺だってわからない。五山がそれぞれどこにあるかくらいは地元民なら誰でも知っているだろうが、効率よくすべてを見て回るための順路など、誰が知るか。
「俺も知らん。第一、本当に時間と位置の関係で全部見るのは無理だと思うぞ」
　慎也は二十円の味噌汁を飲み干して言った。
「だからそれを確かめるんだろ。こういう無駄に挑戦するのが大学生ってもんだ」
　そのとき、俺は不覚にも少し感銘してしまった。大学生は学問に従事するのが本分だと思っていたのだが、たしかにこいつの言うとおり、無駄な活動に積極的であるという特色が最近の大学生にはある。大文字焼きを犬文字焼きに変えようとしたり、いい歳をしてゴムチューブの浮き輪に乗って鴨川を流れていったり、琵琶湖まで自転車でサイクリングに行くなどだ。もっとも俺が経験したことではなくて、よそで聞いたアクティビティだがな。
　とにかく、俺は少し興味を持った。大学生として無駄なことをしてみようかという珍しくも前向きな関心だ。
「そこまで言うなら参加してやらんでもない」
「そうこなくちゃな」
　俺は新しい煙草を取り出して火をつけようとしたところでやめた。さっき吸ったばかりだ。
「でさ、終わったらふたりで祝杯をあげようぜ」
「なんの祝杯だ？」
「男ふたりで無駄に費やした時間を弔う祝杯さ。五山送り火ってのは先祖かなんかを送り出すんだろ？　それに乗っかって俺たちの青春のために空費された時間の消失を祝って乾杯するんだよ」
　よくもまあそんなこじつけで馬鹿なことを思いつくものだと俺は感心した。弔うのに祝杯とは不謹慎だなというのが率直な感想だが、対象が時間ならまあいいだろう。
　そういえば。
「だいたいなんでふたりでやるんだよ。いつもみたいに大人数でのイベントにしたらいいだろ」思いついた疑問を投げかけてみた。
「その日は偶然にもな、みんないないんだよ。帰郷したりバイトだったりでさ」
　まあ無理もない話である。五山の日は必然的に飲食店がにぎわう。そういう店でアルバイトしている奴らは、よほどの用事がないかぎり出勤させられるのだろう。
「まあいいか、じゃあ十六日にな」俺は立ち上がり、慎也に背を向けた。
「え、五山って十五日じゃないの？」
よその人間には十六日なんて馴染みがないからな、無理もない。しかし終戦記念日と混合するか、普通。

2-3

　学内の煙草の自動販売機が撤去されたのは俺にとって由々しきことだった。以前は生協食堂入口に飲み物と一緒に肩を並べていたらしいのだが、近年の禁煙運動の煽りを受けてか、市内の大学内から自販機がすべてなくなってしまったそうだ。
「大きな収入源だったんだけどねえ」
　慎也と別れてから大学を出て、俺は新町商店街にある煙草屋に来ていた。ここは以前大学にある自販機を一手に請け負っていた煙草屋だそうだ。撤去に関する話も店主から聞いたものである。
　俺がこの煙草屋を見つけたのは偶然だった。商店街をバイクで通り抜けるとき、ふと目にとまったこの煙草屋は、店の前を自販機で取り囲んでいたのだ。あれほど多くの煙草の自販機が肩を並べているのをはじめて見たので、バイクを止めて店内を覗き込んでみた。まるで骨董品店のようなディスプレイを俺は一目で気に入り、以来ここで煙草を買うようにしている。
「校内にあったほうが便利なんですが」
　店主は母親と同世代くらいの小柄な女性で、とてもよくしゃべる。先日もささいな話題をきっかけに二時間近く拘束されたのだからたまらない。もちろん適当に切り上げて去ろうと何度も試みたのだが、その都度新たな話題を振ってきて俺を立ち止まらせる。立ち止まって相槌を打ってしまう俺が悪いのだが、どうにも振り切って立ち去ってしまおうという気にならないのだ。また、店主に嫌われてしまっては不都合であるという合理的な理由もある。ここでは煙草を買うと何かとおまけをつけてくれるのだ。百円ライターは当然として、携帯灰皿や据え置きの灰皿、少し豪華なライターなどこれまでにいろいろもらった。皆へのサービスなのだろうが、もし嫌われてはおまけをつけてくれなくなるかもしれないという危惧を俺は抱いているのだ。
「でしょー、やっぱり大学生は煙草吸うものねえ」
「そうですねえ」
　こう言ったときが、「話はもういいぞ」と匂わせるタイミングである。
「じゃあ三千円ね」
　店主は思い出したようにレジスターのうしろの棚からカートンをひとつ抜き出して袋に入れた。俺はいつも煙草をカートン買いする。
「これもうもらった？」そう言って店主が俺に見せたのは、金属の光沢が眩しいダークブルーのライターだ。
「いやもらってません」
「じゃあ入れとくなあ」
　本当はすでにふたつもらっているのだが、ライターはいくつあっても困ることはない。
「どうも」
「おおきに」
　店を出て、バイクの鍵をカバンから取り出したところで、自販機を睨んでいる女の存在に気づいた。ギターサークルの部室にいたあの女だ。レイチェルだったか。
「お前レイチェルか？」と声をかける気になどとてもならないのでやりすごすことにして、バイ

クに跨りエンジンをかけて走り出そうとアクセルを回したところで、レイチェルは俺のほうを向いた。
　まったくの他人というわけでもないので、視線を合わせて片手をあげてやると、レイチェルは笑顔になって俺の前へとやってきた。つまりバイクの進行方向だ。
「同じ大学の人だよね？」
　だから手をあげてやったのだ。わざわざきかなくてもいいだろう。
「そうだけど」
「私一回生のレイチェルです」
　本当にレイチェルと名乗った。笑ってしまいそうだったのを懸命に堪え、怪訝な表情をつくってやった。
「あ、本名じゃないの。あだ名よ。そう呼んでね」
「はあ」
「前さ、ベンチで会ったときのこと覚えてる？」
「ああ、覚えてるけど」
　覚えているのは断片的な情報のみで、レイチェルと名乗る女を無視した、ということだけだ。謝ればいいのか、あのとき何か用事でもあったのか、きくネタはあったがうまく言葉にできない。
「あのとき私、傷ついたんだよ」
　やはり印象は悪かったようだ。しかしそれでも俺を責めるのは筋違いである。俺はあの場からわけもわからぬうちに連れ出されたのだ。つまり満員電車で揺られ、まったく気づかないうちに他人の靴を踏みつけたようなものであって、でもそれでは彼女にとって俺以外に悪い人間はいないことになる。
「悪かったな。だけど言い訳じゃないんだが、俺もなんで立ち去らなけりゃいけないのか、あのときわからなかったんだよ。一緒にいた連れが強引に引っ張るものだからさ」
「友達は変な目で私を見てたね」
　なんだか話が長くなってきた。俺はバイクのエンジンを切って店先に据え置かれている灰皿のほうへと歩いていく。丸太を象ったベンチに座るとレイチェルが隣に腰掛けた。俺は買ったばかりのカートンからパックをひとつ取り出し、ビニルを破いて一本咥え、もらったばかりのライターで火をつけた。
「たぶんあなたの友達は私のことを知ってたのね」
　それはそうだろう。知らない人間をあそこまで避けるのは相当卑屈な奴か、女子がこわいという草食系男子のなかでも最低の部類の奴だ。
「ああ、あいつらが言うにはあんたは変だから関わらないほうがいいと」
「あのね」
　振り向くと、ベンチで俺を見下ろしていたときと同じ、不機嫌そうな、しかしもじもじした微妙な表情で俺を見ているレイチェルがいた。
「なんだ？」

「煙草ね」
　まさか自分は嫌いだから消してほしいとでもいうつもりだろうか。しかし、煙草が嫌いならこんな場所に用はないはずだし、もし嫌いなら俺の隣に座らなければいい。そもそも嫌いなら、どうしてこんな場所にいるのか。
「煙草がどうかしたのか？」強い口調できいてやった。
「一本ちょうだい」
「は？」思わず間抜けな声になってしまった。予想される返答表の裏に記載されていた返答だったからだ。
「嫌ならいいんだけど」
　嫌ではないので一本渡してやった。受け取って口に咥え、そのまま俺を見るので、不愉快だったがライターも貸してやった。
　火をつける動作はまったくさまになっていない。吸い込まずに先端を火であぶっているだけなので、なかなか火がつかないのだ。
「少し吸い込むんだよ」
　ようやく火がついて、吐き出す煙は薄かった。おそらく吸い込んだ煙を肺まで飲み込んでしまったのだろう。ぼんやりしている口から一筋の煙が控えめに立ちのぼっている。
「全部吐き出したほうがいいぞ」
「ふあー」と息を吐き出したがほとんど煙は出なかった。もう体内にしまい込まれてしまったに違いない。煙草を吸ったのははじめてなのだろうという確信が俺にはあった。
「おいしいね」
　絶対嘘の感想だと思ったが、嘘をつく理由がわからないので指摘することもないだろう。
「そりゃよかった」
　見本のつもりで俺は完璧な吸い方を披露してやった。こんなボランティア精神をなぜわざわざ発揮してやったのか、自分でもわからない。
　向こうが何もしゃべらないので、俺も黙って煙草を吸っていた。多少居心地が悪い時間が続いていたが、開封間もない煙草がもったいないのでフィルターが燃えそうになる寸前で灰皿に捨てた。
「じゃあ」
　立ち上がって再びバイクに跨る。鍵を差し込んでキック一発でエンジンをかけた。また進行を阻まれるのだろうかと懸念していたが、レイチェルは丸太に座ったまま俺を見ているだけだった。笑っているのは感謝の念を込めてのことだろうか。そういえば口から礼の言葉が出なかったな。どういう育ち方をすれば、ああなるのだろう。親の顔が見てみたいものだという表現は積極性がありすぎて正しくないが、気になったのはたしかだった。俺はバイクを出して北へと走っていった。

2-4

家のベランダに出て煙草に火をつけた。まるで四六時中俺が煙草を吸っているようにとられるかもしれないが、そんなことはない。必ず、一本吸う毎に一時間ほどのインターバルを設けるようにしている。そのほうが、毎回の煙草がおいしく感じられるからだ。無節操に何本も連続で火をつけるチェーンスモーカーとかいう輩は、煙草の味もろくにわからず無駄に灰を量産するだけの馬鹿だと俺は考えている。煙突のほうが社会的に有意義なくらいだ。

もう六時だが、あたりはまだぼんやりと明るい。空に置いてある雲の流れが観察できるほどだ。東に並ぶ山のひとつは、斜面が三角形のかたちに削りとられていて、大の字が見える。大文字の大の字は、火が灯っていなくても遠くから文字のかたちがぼんやりと観察できるのだ。

吐き出す煙は紫色である。紫煙というらしいが、紫に見えることは少ないように思える。普段はいつも白色だと認識している。しかし、どういう環境下でその観察条件が成り立つのか、たまに紫色に見える。これを見て、じつに幻想的で荘厳な気持ちになる大学生は、京都市内で俺だけだろう。

レイチェルのことについて考えてみた。はじめに会ったのがサークルの部室だ。そのときは上級生だと直感するほどに堂々とギターを弾いていた。サークルの部員なのだろうか。次に会った、つまりお互いを認識したのが、校内のベンチにいたときだ。今思うと、あのとき彼女は俺に煙草をもらおうとしていたのではないだろうか。今日と似た様子だったからな。不機嫌そうにもじもじするのが、彼女が頼み事をするときの癖なのだろう。そして今日、まともに会話した。自販機を睨んでいたが、そんなにほしければ自分で買えばいいというもっともな指摘を今思いついた。一本くれ、と言われたときにどうしてそう言わなかったのか。なぜ思いつかなかったのか。自分でもよくわからない。

いずれにしても、周囲の評価は正しいという結論を俺も得た。どう控えめに観察してもレイチェルは変わっている。周囲は関わり合いになると面倒だ、と言っていたが、俺はべつに構わないのでは、と考えた。あからさまな害になりそうな要素を彼女からは感じない。名前を偽ったり、愛想が悪かったり、かわいかったり、礼を言わなかったりするが、俺はべつにどれも構わない。遠巻きにするほどイレギュラーな存在ではないだろう。おそらく草食系の馬鹿どもはああいった女子に免疫がないのだ。二次元で彼女みたいなキャラクターがいたら崇拝するくせに、本物はこわいというわけだ。まるでドラゴンや幽霊といった扱いだな。

次に会ったときは、煙草を自分で買えと指摘してやろうと俺は心に決めた。

3-1

　知らない番号からの着信が、俺の携帯にあった。普段なら知らない着信には絶対出ないが、この日はなんとなく通話ボタンを押してしまった。おそらく草食系男子共の馬鹿な妄想に侵されての愚考による愚行だろう。恥ずべき行為だと自身でも反省している。
　結果から言うと、それはアルバイト紹介の電話だった。そういえば入学したての頃、大学入口すぐのところで勧誘に応じてしまったことがある。なんといったか忘れたが、学習塾の類の勧誘だったと思う。
　紹介された仕事は、小学生向け理科実験教室の先生だった。先生といっても教壇に立って子供の前で話すのではなく、実験のアシスタントという立場らしい。さらに仕事は土日に集中しており、時給も最悪ではない。
　まあいいかという軽い気持ちで俺は面接に行くことをふたつ返事で承諾した。場所と日時をメモし、電話を切った。
　アルバイトはしたことがないので、面接に行くまではやや緊張していたが、終わってみるとあっけないものだった。「じゃあ次回から」とあっさり採用が決まり、今日は見学していってくれと言われて施設内を案内された。一階に受付と実験室と子供のための談話室があり、二階にも実験室があったが、こちらはただの会議室だった。ホワイトボードと大きめのシンクがあるだけで、本当に実験室として機能するのか怪しいものだ。一階の実験室では授業中だったので、俺はドア上部の小さな窓から覗いて見学した。小学生が白衣を着てちょこんと椅子に座っている。白衣が大きくぶかぶかで、着ているというより着られているという感が強い。俺は子供が嫌いではないが、かといって得意でもない。俺の価値が子供にわかるとも思えない。アシスタントとはいえ、先生としてうまく仕事をこなせるだろうかと少し不安に駆られた。
　今行われている実験は、四年生の花火の実験らしい。なんでも手づくりの線香花火をつくるのだとか。そんなものたいしたことではないと思ったが、火薬まで自分たちで調合するらしい。それも計量からである。なかなか本格的だな、と俺は感心した。
　子供たちは実験机の上に上皿天秤や乳鉢といった器具を並べて実験に勤しんでいる。アシスタントの姿を探してみると、子供たちの間を忙しなく動き回っている大人が数人見えた。だいたい子供四人に対して大人ひとりの割合だ。担任ひとりでやる小学校の理科の授業で行う実験に比べたら、先生の大盤振る舞いである。アルバイトと正職教員の価値の違いだろう。
　まだ授業が終わるまで一時間以上あるらしいので、見学を切りやめてその場を失礼することにした。そろそろ昼時である。不本意ながら大学に用事があったので、バイクに跨って走り出した。

3-2

　生協の学食でいいと俺は主張したが、どうしても今日は贅沢したいと繰り返す慎也に蹴りを入れながら、俺たちは大学を出た。
　北山通りを東に進み、高野川を越えて川沿いの通りを南に走る。しばらく行くと、このあたりではわりと大きなショッピングモールがある。駐輪場に慎也が入っていくので、俺も続いた。
　地下一階に食事スペースがあり、さまざまな店舗が支店を出している。しかし、大半の客はマクドナルドのトレイをテーブルに並べていた。俺もマクドナルドでいいと言ったが、贅沢がしたいとしつこい慎也はレストラン「ポムの樹」に入ることを提案した。
「べつに贅沢じゃないだろう、ポムの樹は」
「俺は入ったことないんだよ、お前みたいな都会っ子と違ってな！」
　なぜ僻みっぽいのか理解できないが、そこまで言うなら今日の昼食はオムライスでけっこうだという気持ちになり、俺たちは店に入った。
　ハヤシソースのオムライスを頬張りながら、慎也は「もう死んでもいい」と言ったので、「あとで殺してやろう」と俺が答えると、「じゃあここはお前が払え」とわけのわからないことをのたまうものだから、俺はフォークで慎也のオムライスをぐしゃぐしゃにかき乱して潰してやった。
「何するんだよ！」
「何か文句でもあるのか？」
「あるだろ！　まだ食べてるんだぞ！」
「腹に入れてしまえば同じだ」
「くそっ！」
　慎也は皿を持ち上げてがふがふと下品な食べ方を開始した。呆れて見ていると煙草が吸いたくなった。どうにも馬鹿を見ると俺は煙草が吸いたくなる。
　結局支払はそれぞれが食べた分を払った。マクドナルドでテイクアウトのコーヒーを買って外の灰皿があるベンチに腰掛けて、煙草に火をつけた。隣で慎也もライターを取り出している。
「で、どうする？」慎也は煙草を咥えて火をつけた。
「何が」俺は煙を吐き出す。白色の煙が高く舞い上る。
「だから十六日さ。ルートは調べてくれたか？」
「なんで俺が調べるんだ？　お前が自分の脚で調べればいいだろ」
「だって、どこかわからないから」
　まったく情けない奴だ。そんなものネットで調べればすぐに出てきそうなものだが。
「あ、そうだ！」突然叫ぶものだから、俺は驚いて思わず煙草を落としてしまうところだった。まだ半分も燃え進んでいないのに、落としたらもったいない。
「一緒に探して回るってのはどうだ？」
　どうだ、ときかれても、どうも、と答えるほかない。実際、どうも思わないからだ。
「そのほうが本番当日の予行練習になっていいだろ？　デメリットは何もないだろ？」
　貴重な地球資源であるガソリンが空費されてしまうのがデメリットだと思いついたが、意見す

ると深い議論になってしまいかねないので言わないことにした。
「それを今からやるっていうのか？」
「時間はたっぷりあるだろ？　俺たち大学生なんだから」
　それは本当であると俺も思った。
「わかった」しぶしぶ俺は承諾の意を表明し、コーヒーを飲んだ。煙草とコーヒーの組み合わせを考えた奴は天才だろう。おいしいコーヒーがあるのに煙草が吸えない環境というのはじつにナンセンスだと俺は思う。
「大学生って身分はいいよなあ。去年なんかこの時期たいへんだったからな」慎也は懐かしそうに遠い目をした。それほど遠い過去ではないから回想も容易だろう。
「ああ、そうだな」
　俺もあの頃はたいへんだった。勉強のほうが呼吸よりも優先事項だ、とばかりに机に向かっていた。それでも今の大学程度しか合格しなかったのは、やはり将来のビジョンが明確ではないためのエネルギー不足だろう。よく大学に入る目的も見えないままにあれほど努力を継続できたものだとわれながら感心する。今のところこの大学でもやりたいことは見出せそうにない。
　煙草を灰皿に捨てたとき、ふいに思い出した。
「そういえば、こないだ煙草屋でレイチェルに会ったぞ」
「マジで？」
　慎也が勢いよくこちらに向くものだから、奴の煙草の灰が飛んできた。
「悪い悪い」俺の目の前の空間を手ではたいて灰を散らす。「なんでまたそんなとこで」
「結果から言うと、あいつは煙草が吸いたかったみたいだ」
　俺は先日ベランダでまとめた考えを慎也に話して聞かせた。ちなみに大学のベンチでレイチェルと会ったとき、俺の脇にいたのは慎也ではないので、詳細を丁寧に説明した。
「それはまた偶然の出会いだなあ」
「しかし偶然にしては出会う頻度が高すぎる。学内ならともかく煙草屋まで手が伸びるとな」
「何それ、もしかしてつけられてるとかそういうことが言いたいの？　自意識過剰なんじゃないの？」
「俺はいつでも冷静沈着、客観視に優れる人間だ」
「でもさ、いつレイチェルがお前に惹かれたっていうんだ？」
「そんなこと俺が知るか」
「でもレイチェルならいいかもな。あの子かわいいし。名前が目立って避けられてるけど、それを抜きにしたらアリじゃない？」
「さあな」
「またそんなこと言って逃げるだろ、お前は」
「俺は逃げてなどいない。本当に心の底から、さあな、と呟いただけだ」
「これだけ人が寄ってきてくれるのに、感謝の気持ちもないなんて人間としてどうかな」
「俺は人間として立派に完成している。これ以上彫るところが見つからないくらいにな」
　救いようがないな、と言って慎也は煙草を灰皿に捨てた。

3-3

　その後ふたりで市内を走りまわり、時間を計ってどうやらこれならいけるのではというルートを見つけ出すことに成功した。やればできるものだなと俺は感心し、慎也は今から楽しみで仕方がないらしく、ぱちんと爆ぜてしまうのではというほど膨らんで期待をあらわにしていた。まったく、よそものの心情は理解に苦しむ。
　家に帰るとすぐにベランダに出て、煙草に火をつけた。俺には室内では煙草を吸わないというモットーがある。
　煙を吐き出しながら洛中を睥睨する。太陽は西の山に沈み、東の山から夜の気配が上ってきて街を覆わんとしているのがわかる。もうすぐ京都タワーが市内に光を投げるだろう。
　俺はこの四ヶ月間の大学生活に思いを馳せた。
　大学に入っても、俺の興味関心を引きつけるものは特になかった。むしろ、大学生とは、この程度のものか、と諦観してしまったくらいだ。
　しかし、自由度という点に関しては、やはり今までとは比べ物にならない。もう本来なら社会に出てもいい歳だ。大学全入時代と言われるが、高卒で働いている知り合いもたしかにいる。
　このままだらだらと惰性に流されて四年間をすごすことになるのだろうか。いや、四年で終わるともかぎらない。大学院への道もあるからだ。聞くところによると、うちの大学の大学院進学率は九割ほどらしい。なぜそこまで勉強したがるのか、その情熱の所在が俺には不明瞭である。
　いずれにしても、このまま自堕落に日々をすごしていくことは間違いなさそうだ。これが植物系男子の宿命である。水と日光以外に求めるものがない植物と同様に、俺たちも食事と睡眠くらいしか必要としない。性欲はあってもなくてもいい。
　しかし、大学入学という契機を境に、何か感化されるような事象があってもよさそうなものだ。求めるでもなく求めている存在の所在がわからず、俺は煙を吐き出した。

3-4

　はじめてのアルバイト出勤の日である。
　担当するクラスは午前に二年生、午後に一年生。それぞれ授業時間は二時間で、準備と片づけのために前後一時間拘束される。つまり実労働時間は八時間である。しかし時給は授業時間分しか発生しない。それで収入は一万弱だ。まったく悪い話ではないだろう。
　俺が着いたのは準備開始の十分前だった。すでに講師先生は白衣を着て準備をはじめていた。いささかの罪悪感があったが、それは不要の長物だという理論が俺のなかでたしかに存在していたので謝ったりはしない。
　講師先生はずいぶんな歳の老人で、その顔には深いしわとたしかな貫禄があった。じつに柔和な笑みを携え、優しさに充ち満ちた話し方をされる御仁だった。
　アシスタントは俺のほかにもうひとり来るらしく、俺と同じく新人だそうだ。しかし四月から働いているらしく、数ヶ月だが俺の先輩にあたる。
　どんな奴だろうかと考えたが、わざわざきいてみるほど気にはならないので、俺はタイムカードを押して準備を手伝った。
　準備の時刻ぴったりに、もうひとりのアシスタントが現れた。顔を見て、俺たちはお互い目を見開いた。
「ここまで偶然が重なると、戦慄すら覚えるな」はきはきとした口調で俺は言った。嫌味のニュアンスは込めていない。
「おはよう。こないだはどうもね」レイチェルは笑っているのか驚いているのか、おそらく笑いながら驚いているのであろう、微妙な表情をしていた。
「しかしいい点もあるな。これであんたの名前がわかる」今度は嫌味っぽく言ってみた。
「それは無理よ」レイチェルは颯爽と白衣を纏い、準備に参加してきた。
「無理ってのはどういう意味だ？」
「私はここでもレイチェルだから」
　もういい加減きいてみたくなった。
「どうしてレイチェルなんて名乗ってるんだ？」
「『フレンズ』って大好きなドラマに出てくるキャラクターにね、レイチェルって人がいるの。私その人に憧れてるから」
　俺だってむかしは孫悟空や大空翼に憧れたりしたものだ。しかしそのままの名前を名乗ったりはしなかったし、大人に近づくにつれてそういったファンタジーへの憧れは冷めていった。それをこいつはまだ大事に抱えていて、それを包み隠す様子もないときたものだから驚くしかない。しかし俺にはこいつの好みや人格を否定する権利はない。
「どこでもレイチェルで通っているのか？」
「そうよ。やむを得ない場合を除いてはね」
　やむを得ない場合というのはおそらく免許証といった身分を証明するもののことだろう。学生証にまでレイチェルと明記されていたら名義詐称になる。
「あんたはうちの大学の学生だよな？」

「そうよ、私は造形」
　うちの大学は工芸科学部という学部ひとつしかない。むかしは工芸学部と繊維学部のふたつだったが、最近統合されたのだ。理由は知らないし、目的もわからない。俺が所属するのは高分子機能工学課程である。こいつは造形工学課程のようだ。
「一回生と言っていたな」
「そうよ」
　そのわりにサークルの部室をひとりで独占し、我が物顔でギターを弾いていたのはどういうことだろう。しかも入ってきた新入生を名乗る俺に対して、ああも堂々とした態度をとるのは同じ新入生としてどうなのか。考えるほど不思議な奴だ。
　俺たちは講師先生の指導のもと準備を進めていく。授業は数ページの薄いテキストに沿って行われるから、実験に必要な器具や道具を出して並べておくだけだ。二年生の授業は風の性質についてだった。ベルヌーイなんて名前を出しているが、二年生にベルヌーイが理解できるわけがない。どこかの犬の名前と誤認してしまうのが関の山だろう。
　準備が終わり、授業時間になると白衣を着た二年生たちが実験室に入ってきた。近くで見ると、子供たちはじつに小さい。子供なのだから当たり前だが、二年生とはこんなにも小さな存在だったのかと驚きである。俺にもこんな小さな時期があったのかと思うとぞっとする。その頃も俺のような大人は俺を見て、小さい小さいとおそれたのだろうか。
　実験の進行はタイムテーブルに沿ってじつに正確だった。授業が終了したのも定刻の五分前である。先生が五分前行動を率先して実践しないと、子供がやるわけがない。子供たちにだけ押しつけて、自分たちは怠惰を貪るなど、教育を一ミリも理解していない証拠である。
　片づけを終え、昼食をとる時間が二十分ほどできた。講師先生と俺とレイチェルは三人で休憩室に入った。
　休憩室は六畳ほどのスペースで、冷蔵庫が二台と四人掛けの小さなテーブルがあった。一台は薬品の保存用らしい。シンクに置かれた籠ではビーカーやピペットが乾かされている。いかにも実験教室らしい。
　講師先生は煙草を取り出して火をつけた。それを見て俺は安心した。
「ここは喫煙スペースなんですね」俺は確認のため言った。問うたことは解が明らかなのに、わざわざ確かめてしまうという性質が、若輩の悪いところである。
「そうだよ」講師先生は笑った。「吸いたければどうぞ」
　もちろん吸いたかったが、室内で煙草に火をつけることに抵抗があった俺は、どうしようか迷った。何気なくレイチェルを見ると、向こうも俺を見ていて目がまともに合った。
　ここで煙草を吸ったところでおいしく感じないことは自明だったが、場の空気を読むことを優先して、俺は煙草に火をつけた。一口目は悪くなかった。
「吸うか？」俺はレイチェルに一本差し出してやった。
「ありがとう」彼女はそれを受け取り、ライターで火をつけた。
　三人が吐き出す煙によって、部屋のなかはすぐに白で充満した。
「君たちは同じ大学だそうだね」講師先生が言った。

「はい」レイチェルが答えた。俺も頷いて応じた。
「学部も同じ？」
「いえ、彼は高分子、私は造形です」
　俺は引っかかりを感じた。
「俺、あんたに高分子だって言ったか？」
「いいえ、聞いてないけど」
「じゃあ誰に聞いたんだ？」
「まあいいじゃない」
　たしかにどうでもよかったが、俺の知らないところで他人が自分についての情報を吹聴しているという状態はあまり好ましいものではない。しかし、こいつがレイチェルだとはじめて聞いたのも、人からの伝聞である。まあ五分五分と認識してやろう。
「それにあんたって呼ぶのやめてくれない？」レイチェルが煙を吐き出して俺の顔を見据える。
「レイチェルだって言ってるでしょ？」
　こいつにかぎらず、俺は他人を固有名詞で呼ぶことが少ない。いや、まったくないと言っても間違いではない。いつもまわりにいる奴らのことを「お前」とか「あんた」とか呼んでしまうのだ。個々人を認識していないわけではない。誰が誰かきちんとわかっているのだが、咄嗟に固有名詞で呼ぶよりも、曖昧な万人共通の呼び名を使ってしまうのだ。
　だから、こいつを「レイチェル」と呼ぶことには抵抗があった。ひとりだけ特別扱いしてしまうようだからだ。さらに言うと、「おいレイチェル」なんて日本人に対して呼びかけるなど、素面ではできないだろう。まして人前でなんて。
「悪い」
　とりあえず謝っておくことにした。今後レイチェルと呼ぶ、という約束の言葉は飲み込んで肺の中までもっていった。
　しかしこいつは謙虚なのか不躾なのかよくわからない奴だ。煙草をもらおうとしてアプローチしてきたときは慎ましやかで奥ゆかしいと思ったが、初対面のときやここでの物言いには謙遜とか尊敬といった人を敬う気持ちがまったく見られない。わざと状況に合わせてキャラクターを演じ分けているのだろうか。
　講師先生がふいに発言した。
「ふたりは仲良しなのかい？」
　この人は馬鹿なのか？　どこをどう見れば仲良しに見えるのだ？
「そんな、ダーマとグレッグじゃないんですから」
　けらけらと笑うレイチェルだったが、俺には意味がさっぱりわからない。講師先生もわかっていないようだったが、優しく微笑んでいた。これがリアル紳士か。
「いえ、初対面に近い関係です」俺は答えた。レイチェルの顔を横目で伺うと、特に不満はなさそうな表情だった。
「そうかい、ちょっと失礼するよ」
　おいおい、失礼するなよ。ふたりきりにしないでほしいというのが今の俺の切実な願いなのだが。

講師先生が出て行った後、部屋のなかには気まずい空気が流れた。誰か入ってこないものかと願ったが、充満した煙草の煙が入室する人を退治してしまうのでは、という妄想が頭をよぎった。
俺は立ち上がり、休憩室入口の反対側にある勝手口のドアを開いた。そこは塀と建物に挟まれた細い庭のようなスペースで、草木が申し訳程度に存在していた。
「ちょっと外の空気を吸うから」
そう言って俺は灰皿を持って外に出た。壁にもたれて立ったまま空を見上げる。湿度の高い、ぬるりとした空気に押しつぶされそうだった。
やはり外で吸うほうが煙草はおいしい。吐き出す煙も自由度の高い空間に飛び出ることを喜んでいるようだ。
勝手口のドアが開いて、レイチェルが出てきた。俺の隣で壁にもたれる。
「なあ」
「何？」
「煙草ほしいなら自分で買えよな」
レイチェルはこちらを向く。無表情だった。少なくとも俺には表情からなんら情報を読みとることはできなかった。
「いつも吸うわけじゃないから」
「そうかい」
しばらく沈黙の時間が続いた。
俺のまわりに人が勝手に集まってくるという話は幾度かしたが、こんなふうに女子が寄ってくることも珍しくない。主には草食系の唾棄すべき男共だが、稀に勇者が混じっていて、そいつの魅力が女子をも呼び寄せることがあるのだ。あるいは俺というプレシャスな存在に惹かれる奴もいた。きっかけはなんであれ、気づいたら仲良しになっているということは今までもよくあった。魅力ある人間は自然と人を呼び寄せるのだ。男女分け隔てなく。
しかし、こういったイレギュラーな人間が近寄ってくるのははじめてだった。レイチェルがどう特異なのかは、もはや説明の必要がないだろう。俺にはこういう奴の対処の仕方がわからない。第一、勝手に寄ってきているのだから、俺が気を遣って対処を悩まなくてもよさそうなものだが、俺は基本的に善人なのだ。善人であるゆえに、ずばずばと本質を突く物言いをするので一方的に嫌う了見の狭い奴もいるが、逆にそれに惹きつけられてさらにすり寄ってくる奴らもいた。俺みたいな奴は、どこにだっているだろうし、皆一様に俺と同じ処遇にあるだろう。
ともあれ、レイチェルの扱いに困っているというのが俺の現状だ。何を話せばいいのか、よくわからない。普段なら、話をする必要などない、と切り捨てるのが俺の持ち味だが、なぜだかこいつが近くにいると話さなければいけないという強迫観念めいた感情が湧いてくる。こんなこと、はじめてだ。
「ねえ」
「なあ」
切り出しが重なるほど恥ずかしいものはない。本屋で同じ本に手をかけるというシチュエーションが幻想世界のイベントとしてよくあるが、あれを実際にやってしまうと、その事実を抹消す

るために相手を殴ってしまおうかという思いに駆られるほどのエネルギーが生じる。今ちょうどそんな感じだ。
　俺はレイチェルの顔を殴ってやろうと手を二ミリほど動かして、その手を開いて「どうぞ」と相手を促した。
「十六日ヒマ？」
　十六日といえば、慎也との忌々しいイベントがある日である。
「夜は用事があるけど、朝昼なら何もない」
「夜がいいんだけど。知ってる？　十六日は五山の送り火なんだよ」
「知ってるとも。俺は京都の人間だからな」
「えっ、そうなの？」レイチェルは目を見開いて、驚きましたと顔いっぱいに表現した。
「わからないか？」きいておいてなんだが、わかるわけがない。俺だって、誰がどこの出身なのかなど、わからないのだから。
「見えなかったぁ。全然京都っぽくないね」
　これは失礼に当たるのだろうか。まず京都っぽいという概念の定義から教えてほしい。失礼かどうかの議論はそれからだ。
「京都っぽいってどんなんだ？」
「五山をね、一緒に見に行かない？」
　おそらくこいつは礼儀礼節の類を高校の机に置き忘れてきたのだろう。人の話を聞かない人間はかなり性質の悪い部類に入るし、あだ名を名乗り通すというまったく無意味な執念は、大抵の人にとっては避けて通りたいいばらの道だと思われるに違いない。
　しかし、その相手の意向や意見を無視してまで自己主張する心義や信念を持つ、という捉え方をすれば、評価してやれんこともない。無視されていささか腹の虫が騒いだが、自分から積極的に動き出すという点は高ポイントだ。
「お前、バイクに乗れるか？」
「え？　ううん、免許ないから」
「自転車は？」
「それは乗れるよ」少し膨れてレイチェルは言った。
「ならいい」
「あのぅ、私の話聞いてた？」
「いいよ。一緒に五山を見に行こう」
　レイチェルの目を見ながら言ってやると、なぜか身を翻して俺に背を向け、黙って勝手口から中に入っていった。
　は？
　どうなっている？
　なんだ、あの態度は。
　あまりの理不尽さに、腹が立つどころか伸びるように突き出して白衣を突き破るのではないかと思うほどに、髪が急に伸びて建物三階の窓ガラスを突き破ってしまうのではないかと思うほ

どに、むかついた。
　まさか、俺を謀ったのだろうか？　そして俺は馬鹿みたいに応じてしまったのか？
　いやしかし、それはあまりにも幼稚で拙い悪戯だ。そんなこと今時小学生だってやらないだろう。幼稚園児だって呆れるに違いない。
　しかし、怒りのやり場がないので、俺は勝手口を勢いよく開いて、可能なかぎり怒りにわれを忘れている顔を演じた。本当はそこまで怒っていないのだが、過剰演出も人間関係には適宜取り入れなければいけない要素である。
　レイチェルは椅子に座らず、床にうずくまっていた。彼女の姿を見た途端、俺のなかの怒りはしゅるると萎んで小指の爪よりも小さくなってしまった。俺は屈み込んでレイチェルの様子をうかがった。
「おい、どうした？　大丈夫か？」肩に手をかけながら、きいてみた。
　レイチェルは膝に顔を埋めながら小さく震えている。原因がわからない。しかし、耳を澄ませると、小さな唸り声のような音が彼女から発していた。
「泣いてるのか？」本当はチンパンジーが腹痛で苦しんでいるようだ、という感想を持ったが、相手が女性であるという点を考慮し、美化に美化を塗り重ねて美化してみた。
　徐々に唸り声が大きくなってきた。甲子園で鳴り響くサイレンみたいに、低音から高音へと変化していく。ついに、「うう一」という唸り声は、「きゃー！」という叫び声になった。同時に上げたレイチェルの顔は歓喜の表情になっていた。
　俺は驚いて肩から手を離して少しあとずさった。うしろ手でシンクを抑えて身体を支える。そうしていないと、地面に尻をついてしまいそうだった。
　一転、つむじから魂が抜けていってしまったのでは、と思えるほどに、レイチェルはぼーっとした表情となり、幽霊の目つきで俺を見た。目には喜びも悲しみも何も映っていない。
「約束だよ」無色の言葉で彼女が言った。
　一瞬なんの話かわからなかったが、シャボン玉が割れるほどの時間で冷静さを取り戻した俺は、彼女が先の会話の続きをしているのだと気づいた。
「あ、ああ」
　われながら、答えたときにつくった笑顔は、人生の中でも三本の指に入るほど嘘くさかったことだろう。

3-5

　その日の夜、ベランダで街の夜景を眺めながら俺は慎也に電話した。
「というわけで、レイチェルも行くことになったから」
「何が、というわけで、だよ」
　やらしいやらしいやらしいやらしいとあまりに連呼するので、今度会ったときに奴のクソ醜い顔面に冷ややっこを投げつけてやろうと心に決めた。
「だいたいどうやって一緒に行くんだよ。自転車なんだろ？　俺たちのミッションは制限時間つきなんだぞ」
「そこが少し楽しいかもしれないと思ったとこだ」
　俺は細い裏庭でレイチェルが自転車しか乗れないと言った瞬間に浮かんだアイデアを慎也に言って聞かせた。
「お前、よくもそこまで鬼畜な考えが浮かぶな」
「そんな言葉で形容されるほどの悪行じゃない。喜ぶかもしれんぞ」
「絶対嫌がるって」
「だから愉快だろ？」笑顔をつくったが、誰も俺の顔が見える奴はいない。
「自分に気がある子に対してそんな仕打ちするなんて……第一危ないだろ？　事故ったらどうするんだよ？」
「そうならないためにお前がカバーするんだろう」
　慎也のため息が聞こえた。じつにクリアに聞こえたのでわざとだろう。
「なんでお前みたいな奴がモテるんだ？」
「さあな。でも大学生は無駄なことに手を染めるべきだと言ったのはお前だろう」
「健全な恋愛活動は無駄なんかじゃないと思うけど」
　俺にとってはじつに無駄無意味無益甚だしいことである。
「いいから協力しろ」
「知らないよ。学内でお前の悪い評判が出回るぞ」
「レイチェルから一本とった勇者として歓迎されると俺は踏んでるんだが」
「もしかしたら、少数だけど、そんな意見も出るかもな」
　電話口で慎也が笑ったのが聞こえた。

4-1

　あっという間に十六日がやってきた。
　午後七時すぎ。俺は出町柳に来ていた。すでにあたりには人が集まりはじめている。点火までまだ一時間弱あるというのに、鴨川デルタと呼ばれる賀茂川と高野川の合流地点は人の熱気で溢れていた。ちなみに、この場所を鴨川デルタと呼んでいるのはよそから来た奴らのみだろうと俺は分析している。長くこの地に根を張って住んでいるが、大学に入って慎也が「デルタデルタ」と騒ぎ出すまで俺はそんな言葉を聞いたことがなかった。俺と同じ地元民もそう思っているだろう。
　集合時間を七時すぎと曖昧に伝えていたので、七時五分ほどに到着してもふたりの姿は確認できなかった。曖昧に伝えたのがいけないので、俺が待ち時間にいらいらしてもふたりの責任ではない。つまり、「遅い！」と責めるのは筋違いというものである。
　しかし、七時半すぎに悠々と姿を現したレイチェルになら多少の罵詈雑言も許されるだろう。
「お前のなかではすぎってのは半時まで含まれるのか？　それで友達失くしてこなかったか？」
　精神的ボディブローを繰り出すと、自転車から降りたレイチェルのニコニコ顔から表情がさっと消え、わなわなと肩を震わせはじめた。
　よし、さらにここからたたみかけてやる。俺にはサディスティック気があるのかもな。
「謝罪の言葉もないのか？　お前のボキャブラリーはセキセイインコ以下か？」
「誰？」
　冷たい声だった。さらに冷たい目線は慎也に向けられている。
「はじめまして、こいつの親友の坂本です」
　慎也は七時十分くらいに現れた。ふたりで待ちながら、煙草を吸っているうちに、俺はレイチェルに時間と場所だけを伝えて、同行する慎也の存在を伝えるのを忘れていたことを思い出した。
　たいしたことではないと考えていたが、どうやらたいしたことだったらしい。
「ああ、そういえば言い忘れてたが、こいつも一緒だから。ちなみに親友ってのは誇張表現だ」
　咄嗟に言い訳してみたが、説得力に乏しく、相手の気持ちへの配慮に欠ける発言である、と口を閉じてから気づいた。
　レイチェルは気合を入れてきたらしく、普段学内で見かけるときよりも洒落た服装だった。しかし、似たような格好の女性は京都駅周辺に配り歩くほどいるだろう。
「ちょっと」レイチェルは手招きして俺を慎也から離れたところへ引っ張っていった。
「どうした？」
「あの人も一緒なの？　あんた、馬鹿なの？」
「俺は橋の下で飲んだくれている大学生を全部足し合わせたよりも賢い」
「やっぱり馬鹿じゃない」レイチェルは見せつけるように舌打ちした。「やっぱり男なんて馬鹿ばっかりね。見かけに騙された」
「お前の沽券のためにも言っておくが」俺は正直に言った。「普段の俺ならこういう馬鹿はやらない。だが、今日は前々から慎也と約束してたし、そこに振って湧いたお前の件だから、少し遊

び気分を味わおうと思っただけだ。誤解されては困るな」
「それがどう私の沽券に関わるのよ」
「お前の見る目はたしかだということだ」
　レイチェルは俺をぐっと睨みつける。怒った顔は白いプランター程度には魅力的だ。
「何それ。自意識過剰なんじゃないの？」
「俺はいつでも冷静だし、客観視に優れる人間だ。今日は魔が差しただけだ。普段なら、女性への対応は完璧にこなす男だ」
「よくもまあそうぬけぬけと言いたいことが言えるわね」先ほどまで怒っていたレイチェルだったが、俺の言葉を聞くうちに呆れるような表情になってきていた。
「近寄る者を俺は拒まない。勇気には敬意を払って、それなりに応えるつもりだ」
「じゃあ応えてもらおうじゃないの」ここで、レイチェルはようやく笑顔に戻った。
「私だってがんばったんだから、それなりのバックがないとつり合いがとれないわ」
　自意識過剰はどっちだ、と言いたくなったがわざわざケンカを売ることもあるまいと思い、俺は黙って慎也を呼び寄せた。
「今日は三人で楽しもうよ」慎也の口調はじつに軽い。こういう男は同姓から見たら好印象だが、異性はどう思うだろうか。女性のタイプに依るかもしれないが、もしかしたらレイチェルにははまらないのでは、という直感が俺にはあった。
「えーと坂本君だっけ？　私はレイチェル。よろしくね」
　愛想よくレイチェルは言った。
「知ってるよ。有名人だもんね」
　それは言わないほうがいいのではと思ったが、案の定、レイチェルの顔が固くなった。
「どういう意味？」
「不思議な通り名を持つ美人が造形にいるって噂があるんだよ」
　おお、やるじゃないか。
　レイチェルに笑顔が戻った。単純な奴だ。もしかしたらおべんちゃらをホワイトホールのように吐き出し続ける慎也とはいい配合なのかもしれない。しかし奈良にいるという浪人生の彼女には気の毒である。まあ俺の知ったことではないが。
　しばらく三人で他愛もない話、出身や試験の出来などについて花を咲かせていると、あたりに人だかりが増えはじめた。
　そろそろ移動したほうがいいだろう。
「慎也」
「そうだな」
「おい、行くぞ」俺はレイチェルを見て言った。
「へえ？　どこへ？」レイチェルは間抜けな声をあげた。

4-2

　俺たちは今出川通りを東に進んでいく。川端通りの喧騒が遠のいていく。
　なぜ移動するのかというと、俺と慎也が小さなミスを犯していたからだ。
　事前に道順を確認したときは問題なかったのだが、当日の川端通りは、交通規制がかかっていたのだ。警察が道路を封鎖し、川端通りを北上することができなくなっていた。ここを通って次に行く予定だったのだが、出鼻をくじかれたかたちとなったわけだ。
「それくらい調べといてくれよ」
　偉そうに言った慎也を俺が小突いてやったのは言うまでもない。ちなみに小突いたというのはじつに控えめな表現で、具体的に慎也が受けたダメージは、棚扉の角に頭をぶつけた痛みの五倍くらいと表現すれば理解に易しいだろうか。
　時計を確認する。時刻は八時二分前。俺たちは百万遍交差点に来ていた。ここも人で溢れている。大学が近くにあるためか、人ごみの平均年齢は低めだ。
「おい慎也」
「ああ、そろそろ？」
　俺と慎也が停めておいたバイクを押して信号を渡ると、うしろからレイチェルがついてきた。
「何？　どこ行くの？」
　俺たちは交差点の北側の道脇にバイクを持ってきて跨った。
「どこって、五山を見に行くんだろう」俺はヘルメットを被りながら悪戯めいて言った。
「見に行くって、もうそこに見えてるじゃない」
　レイチェルの指さす先には、東に黒く聳える如意ヶ岳がある。その山肌に大の字の火床がある。
「今日は五山を見る日なんだよ」慎也がおかしそうに言った。「大文字だけじゃ足りないんだ」
「もしかして、ほかの四つも？」
「そうだよ」
「そんなのできるの？　たしか点火って十分おきくらいなんじゃ……それにほかのってけっこう離れてるんでしょ？」
　どうやらある程度は調べてきているようだ。その下準備をする姿勢は微笑ましいものだと俺は思った。あとでそのことについて触れてやろうか。どんな反応をするのか興味がなくはないといえば積極的すぎる。つまり、まったくない。
「それをやってみるんだよ。大学生だからね」
　時計の針が八時を示した。周囲にむくむくと期待と緊張感が入り混じった空気が立ち込める。
「おい」俺は彼女に声をかけた。
「うん？」
「隣に来い」
　何を思ったのか、自転車を降りて俺のバイクのうしろに跨ろうとしたので、両頬を握りつぶして押し返してやった。ちなみに俺も慎也も原付である。
「何すんのよ！」手を振り払ってレイチェルは叫んだ。

「誰がうしろに乗れと言った。自転車に乗って隣へ来いと言ったんだ」
「だからって女の子の顔掴むなんて！」
「お前、顔小さいな」
　レイチェルは自転車に跨り、俺の左隣についた。
「で、なんのつもり？」口調は怒っているが、顔は怒っていない。
「こうするんだ」
　言ったのは慎也で、バイクを移動させてレイチェルの右についた。格好としては、二台の原付が自転車を挟みこんでいる状態である。
「なんなの？　まさか、このまま」
「あ、ちなみにこれこいつのアイデアだから」慎也が俺の顔を指差して言うものだから、俺はその指を下からライターであぶってやった。
「あっつ！」慎也が手をばたばたと振る。そんなことをしても、夏の熱気は冷やしてくれないだろう。
「つい煙草と間違えた」
「ねえレイチェルさ、こんな奴やめといたほうがいいよ」
　ささやくように慎也はレイチェルの耳元で言ったが、俺にも丸聞こえの音量だ。
　あたりに歓声が沸き起こった。
　俺たち三人は、東の山を見た。
　山の斜面にぽつぽつと火が灯っていく。しだいに火の勢いが増していき、点々とした塊は隣同士で連続し、ついには大きな大の字が夜空に浮かび上がった。
　もう幾度も見た光景だが、何度見ても見惚れてしまう。何が俺を惹きつけているのだろう。山に合法的に火を放つという背徳感ではないと思う。それよりももっと、純粋にきれいだと思えるような美の意識だろうか。そんなもの、俺にあるのか。
「よおし、次！」慎也がバイクのエンジンをかけた。俺もキックしてアクセルをふかせる。
「おい」俺はレイチェルに声をかけた。
「何？」
「我慢しろよ」
　俺はレイチェルが座るサドルにうしろから手をかけて、自分のほうへと引き寄せた。必然的に、身体が密着する。
「ちょっと！」言いながらも抵抗はしない。
「まあ事故がないよう安全運転で行くからさ」慎也が面白そうに言った。
　俺たち三人はサンドイッチのようになって発進した。

4-3

　京都の五山送り火は、八月十六日の午後八時からはじまる。五分から十分おきに、それぞれの山の斜面にある火床が灯され、漢字や記号が京都の夜に浮かび上がるのだ。
　ところで五山送り火は、五山というのに火床は六ヶ所ある。数えてみるとわかるだろう。「大文字」「妙」「法」「舟形」「左大文字」「鳥居」の六つだ。
　おいどうなってる、と俺も子供の頃に思ったものだ。その疑問を両親にぶつけてみたのだが、どちらも知らなかった。大人の無知は、子供を失望させるのだ。

4-4

　東大路通りを北上し、北大路から川端通りに入って高野川沿いに上っていくと「法」の文字が見えた。距離が近いので、大の字のように美しく火が連なっていないのが惜しい。しかし、目の前に広がる壮大さには舌を巻く思いだ。
「ほら、ここからならよく見えるだろ」
　信号を越えたところで停車し、俺たちは北に低く居座る山を眺めた。
「けっこうばらばらなんだ」慎也が感心したように言う。「それだけ距離が近いってことだし、逆に大文字はずいぶん遠いってことだね」
「そうなるな。次は北山通りを左に折れてしばらく進まないと見えない——おい、痛いんだが」
　俺は言葉を切ってレイチェルに声をかけた。こいつが俺の左腿を掴んでぐいぐいと力を入れているからだ。
「あ、ごめん。興奮しちゃって」慌てた様子で手を引っ込める。
「レイチェルって興奮すると男の太腿を握りつぶすの？」茶化したように慎也が言った。
「なんでそうなるのよ、違うわよ。自転車であんなに速く走ったのはじめてだし、火が灯ってきれいだし」レイチェルは胸に手を当てる。「それでちょっと力が入っちゃったの」
「次行くぞ」
　俺たちはサンドイッチ走行を再開した。

4-5

　北山通りは両脇の歩道に人が溢れていた。このくそ暑いのに、見苦しく暑苦しく詰め詰めになって皆北の山を見上げている。
　地下鉄「松ヶ崎」駅前で、北の山に「妙」の文字を確認した。時刻は八時十五分である。
「知らなかった」走りながら俺は脇のふたりに言った。
「何が？」レイチェルがきいてくる。
「すごい低いんだってこと」
「ほんと、言われてみたら」
「あれって妙って読むの無理ないか？」
　たしかに、と俺は思った。なかなか的確な指摘だ。慎也のくせに。
「なんか離れたところに点みたいなのあるね」
「妙って文字が一番曲線的だから、表現が難しいんだろ」
「私、これ好きかも」レイチェルの声は、どこか幻想的で気持ちがこもっていない。
「へえ、なんで？」慎也がきいた。
「文字のデザインとして一番きれいっていうか、センスがあるかも」
「ふうん、そういうもんかなあ」
「造形だからって、調子のんなよ」俺はきつめのひと言をレイチェルに浴びせた。
　俺の挑戦的な皮肉を受けても、レイチェルは何も言わなかった。そのかわりに、彼女は俺の太腿をぎゅっと握りつぶして訴えてきた。
「危ないだろ！」俺は叫んだ。
「いちゃいちゃすんなよなあ」俺たちのやりとりを見ていた慎也が言った。

4-6

　賀茂川に架かる北山大橋を通りすぎたところで、北西に位置する船山に「舟形」が一瞬だけ見えた。船という漢字ではなく、折り紙でつくったような船形である。
「あれが船？」レイチェルが言った。
「一応な」
「無理があるなあ。どっちかっていうと弓矢みたいに見えるけど」
　言われてみるとたしかに弓矢のように見えなくもない。下界に矢を放つ寸前のように引き絞った状態だと言われたら納得せざるを得ない程度にかたちが類似している。
「船山にあるんだから舟形でいいんだよ」
「舟形があるから船山なんじゃないの？」レイチェルがきく。
「そのへんの議論はまたあとで」詳しくは知らないので、適当な言葉で逃げた。そんな瑣末でマニアックなことを知っている大学生なんているのか？
　俺たちは北山通りを西へと進んでいく。もう残りのふたつには火が灯っている時間だ。はじめの「大文字」はそろそろ消えてしまうだろう。

　このあたりで気づいたことがある。それは、俺たちのほかにもバイクで五山を見てまわっている人間がいることだ。皆若く、大学生ルックである。さすがに大学の街だけあって、馬鹿で酔狂な奴らがたくさんいるのだ。こういう街に生まれてよかったと思う瞬間である。
　北山通りを道なりに西へ進むと、自然と左に倒れて南北を貫く千本通りに変化する。千本通りに直交する北大路通りで右に曲がりしばらく進むと、また自然と左に倒れて、今度は西大路通りに変化する。この複雑さを俺が覚えたのは大学生になってからだ。それくらい、俺の行動範囲は狭かったという証明になる。
　ちょうど北大路通りから西大路通りにかわるカーブに差しかかったあたりで、「左大文字」が現れた。
「こっちのほうが大きいね！」興奮した様子でレイチェルが言った。俺のほうはそろそろ彼女の背にまわした左腕が疲れてきている。
「そりゃ近いからだろ」冷静に言ったので小声になってしまった。聞こえたかどうかわからない。
「あとひとつだ！　時間は？」慎也がきいた。こいつも興奮しているのか叫ぶような音量だ。
「今半前だから、まだしばらく灯ってるはずだが」
「いけるんじゃない？」
　レイチェルの目が輝いているのが一瞬だが見えた。期待に満ちた表情だった。普通の男なら、この顔を見て落ちてもおかしくないだろう、と思わせる程度に魅力的であったことは認めざるを得ない。
「最後のひとつは遠いからな」俺は言った。

4-8

　四条通りをずっと西へ行くと、桂川に架かる松尾橋がある。橋の上から最後の五山である「鳥居」が見えるはずだったが、もう火は消えていて、「鳥居」のかたちは確認できなかった。火床では消火活動が行われているのだろうか。もうすっかり闇に沈んでいて、人の姿もここからは遠すぎて見えない。
「惜しかったな」
「そうだなあ」
「残念ね」
　ここまで法定速度を優に超えたスピードでとばしてきたのだが、ぎりぎり間に合わなかった。時刻は午後九時である。
　俺たちは五山を見届けた余韻に浸り、しばらくその場に立ち尽くした。十分前までいっぱいだっただろう松尾橋のうえにはもう人影も少なくまばらである。
「まあチャレンジしたんだから、完全燃焼したさ」慎也が明るく言った。
「まったく無駄なことだったがな」
「でもちょっと楽しかっただろ？」
　正直、五山を見てまわる行為自体はそれほど楽しくはなかった。だが、隣でバイクのスピードに怯えたり興奮したりしているレイチェルを引っ張っていくことはやや愉快なものだった。まあ言わないがな。
「普通だな」
「味気ないなあ」
「俺は常に無味無臭だ」
　のどが渇いていたし、煙草も吸いたかった。
「ねえ」レイチェルが俺のシャツの裾を引っ張った。
「なんだ？」
「もう帰るの？」
「いや、これから打ち上げ的なものをするらしいが、そうだろ、慎也？」
「そうそう。レイチェルも来るでしょ？」
　ずっと座りっぱなしで尻が疲れたのだろう、レイチェルは自転車を降りて背伸びをした。背骨が悲鳴をあげるような、すごい音が聞こえて、俺はぎょっとした。
「そうね、まだまだ夜はこれからだもんね」

　俺はいつも十一時前には風呂に入る。そして眠気が瞼の上でスウィングダンスを踊り出すまでベッドで本を読むのが好きだ。そうした生活のサイクルをかき乱されることを俺は嫌う。
　だが、そう主張してもう帰りたいと意思表明しても、ふたりは俺の意見を聞き入れようとはしなかった。
「お前、規則正しい生活なんて大学生として間違ってるぞ！　恥を知れ！」
「そうよ！　日付がかわる前に寝るなんて馬鹿じゃないの？」
　ここは賀茂川のほとりである。北山橋と北大路橋に挟まれた川べりで、西側には一定間隔でベンチが設えてある。そのひとつに陣取って、俺たちは十時前からここでささやかな宴会を催している。
　時刻はもう十一時をすぎている。つまり、俺の身体は最後に風呂に入ったときから二十四時間以上が経過していることになる。季節は夏であり、特に京都の夏というものは土地柄もあって驚くほどすごしにくいことで有名だ。からりとした暑さではなく、じわじわと押しつぶされそうな暑い空気が迫ってきて身体を包み、叫びたくなるほど居心地が悪い。酔っているから叫びたいのではなく、暑すぎて叫びたいのだ。
　服が身体にひっついて気持ち悪い。今日は特に気温が高い。もうすっかり夜で場所も川べりだというのに、まったく涼しくなく、むしろ余計に湿度が高くて最低な環境だ。
　なぜこんな場所で宴会をしているかというと、居酒屋に入るほど金がないからだ。貧乏大学生の飲み会は、大学校内か賀茂川沿いと決まっているのである。これが京都の伝統だと市内中の大学に流布されているらしいが、そんな伝統はどこかよその地域から来た大学生が考案したものだろう。もともと市内に長く住む人間がわざわざ川べりを選んだりするわけがない。夏は暑すぎるし、冬は寒すぎて死んでしまいかねないからな。
「いやー楽しかったなあ！　盛り上がってたなあ！」慎也はもうでき上がっている。プラモデルの色塗りを終えたような完成度だ。頬がピンクっぽい赤でペインティングされている。
「私も！　京都っていっぱい人がいるのね！」
　いったいこのふたりはどんな田舎からやってきたのか。実家ではまだ黒電話とかを使ったり、鶏の首をぶった切ったりしているのではないだろうか。
「こんな都会に子供の頃から住んでるなんて、お前は幸せな奴だよ、ほんとに！」
「そう思ったことはほとんどないがな」
「なんでぇ？　贅沢よ！」レイチェルがにゃははと笑った。
「お寺とか神社がいっぱいあって、お祭りもすごい規模だし！」
　そんなものは全国どこにでもあるだろう。奈良にだって社寺仏閣はたくさんあるし、祇園祭だってにぎやかなのは四条あたりだけだし、そういえば、
「お前はどこ出身なんだ？」
「私？　アメリカのカリフォルニアだけど」
　正拳突きしてやろうか。それとも相手にしないほうがいいだろうか。
「じゃあ日本国籍はないのか？」いかにも面倒臭い、というふうにきいてやった。

「あるよ。私日本人だもん」
　こいつも酔っているのだろうか。しかも慎也よりも性質が悪い。普段の奇行に妄想が加わって全面的に扱いにくい人間となってしまっている。いやあるいはこれがデフォルトか。
　しかしふたりとも酒に弱すぎる。まだ梅酒のチューハイをふた缶空けただけではないか。コンビニで買い込んだ酒類はまだまだビニル袋に残されている。もう温くなってまずいだろうが。
　俺は酒に強いほうだ。しかし、それは決して威張ったり自慢したりすることではないと俺は考えている。なぜなら酒を飲む目的とは酔いの快楽を体験することで、酒に強いというのは酔いにくいということであり、酔うためには多量の酒が必要になる。つまり効率が悪いのだ。自動車の燃費にたとえたらわかりやすいだろうか。俺は少し進むのにも多量の燃料を必要とするスポーツカーである。一方ふたりは、京都市内では重宝される軽自動車だ。環境にも財布にも優しいのは、明らかに後者である。
　レイチェルの相手をするのが面倒になったので、俺は東に黒く佇む植物園の森のほうを向いて煙草に火をつけた。河原での喫煙は良識に背く行為だが、ゴミを出さなければ構わないだろう。俺のような知的で良識溢れる好青年を責めるより、街中に平気でポイ捨てする馬鹿共だけを取り締まってほしいものだ。
「ねえ、無視しないでよぉ」少し甘えた声で言うレイチェルの目はとろんとしていた。もう眠いのかもしれない。
「冷たい奴だなあ」慎也は持っていた缶を一気に空け干して、次を探してビニル袋をがさがさしている。
「俺はもう眠いし風呂に入りたいんだ」
　煙草の煙を吐き出す。べたつく空気の中で吸う煙草はまずい。まずいとわかっていて火をつけてしまった自分が嫌になる。
「まあお前も飲めよ」慎也がギネスの缶のプルタブを開く。こいつが酒を買ってきたのだが、どういうセンスをしているのか、まったく統一性のない品揃えだった。ビールからチューハイから日本酒まで雑多に詰め込まれたビニル袋を見て、俺が慎也に蹴りを入れてやったのはもうずいぶん前だ。
「俺が一番飲んでるんだよ」俺はビニル袋に入っていた缶の大半を空けてしまっていた。それでも俺の頭に甘い酔いの誘いは訪れない。
「うぇぇ、温いギネスってまずいな」
　温いビールがうまいわけがない。
「一口ちょうだい」
　慎也はレイチェルに缶を手渡して、そのついでに手を握ろうとしてばしんと叩かれていた。それを眺めながら、俺は携帯灰皿に灰を落とした。
「ほんと、まずいねえ」
　そう言うと、レイチェルは俺に缶を差し出してきた。
「なんでふたりでまずいと確認したものをわざわざ俺に飲ませようとする？」
「もう開けちゃったし、飲んでよぉ」

　ため息をついて缶を受け取り、ごくごくと飲み干した。ギネスは炭酸が弱くて俺にはちょうどいい。
「すごーい」アホの子みたいに拍手するレイチェルに空けた缶を返してやる。この煙草を吸い終わったらもう何を言われても帰ろうと決意した。
「なんか俺、しんどくなってきたわ」慎也が言った。急にふらふらと頭をもたげはじめた。
「それ毒入ってたんじゃねえ？」
「入ってねえよ。もし入ってたら俺はどうなる」
「そんなもん知るか」座っていられなくなったのか、慎也は姿勢を崩して隣に座るレイチェルの膝の上に倒れ込んだ。
「ちょっとぉ」
「レイチェルぅ、介抱してよぉ」
　馬鹿な男の本性がついに発揮された。酔いにまかせて女に迫ろうというのだ。呆れたものだが、酒の力を借りないと決定的一打が打ち出せない輩というのはたしかにいるものだ。
　しかし慎也はそんな奴ではないと俺は考えていたのだが、そうでもないのだろうか。それともこいつにとって、レイチェルが何かしら特別な存在だとでもいうつもりだろうか。だとしたら、今日のことは俺に感謝してもらわねば。今度生協で昼食を奢らせよう。
　だがしかし、男の酩酊というものはじつに醜い。同姓だからそう思うのだろうか。女から見れば、母性本能をくすぐるような状態に映るのか。こんなゴミまがいの汚物がかわいらしく見えてしまうのなら、俺は男でよかったと心から思う。
　俺は煙草の火を消して立ち上がった。
「俺はもう帰るぞ。限界だ」
「そうね、そろそろいいかも」膝には載せているが、じつに嫌そうな顔のレイチェルである。「ねえ、慎也君どうしたらいい？」
「どうもしなくていい。ここに放置しておけば、粗大ゴミのトラックが運んでくれるか、朝ジョギングするじいさんが救急車を呼ぶだろうよ」
「冷たいわねえ、友達でしょ？」
「否定はしないがな、男なんて放っておけばいいんだよ」
「じゃあ自分が酔っぱらったときもそうされてもいいわけね？」
「さあ、考えたこともないな」
「じゃあ考えてよ」
　鋭い声だった。「もし私があんたを放って帰ったら、どうする？」
　俺は質問の意図を探る。すぐ上ってきた正直な答えは「どうもしない」だが、満点の回答とは言えないだろう。なぜ満点を取る必要があるのかと意識が反れたが、すぐに修正して本題を見つめなおす。
「それは困るな」少しリップサービスしてやった。
「ほんと？」
　もちろん嘘だが、この反応が得られたところを見ると、正解のようだ。
「ああ」

「じゃあ酔いつぶれたら私が介抱してあげる」レイチェルは笑った。柔らかい笑みだった。
「好きにしたらいい」
　まったく、じつに馬鹿げた会話だ。

5-1

　時刻は十二時をまわっているというのに、俺はまだ家のベッドにおらず、北山通りを東へ走っていた。隣で引っ張る自転車にはレイチェルが乗っている。その隣には誰もいない。
「送ってよ」
　川端の通りに上がり、そのままバイクで帰ろうとした俺を、信じられないといったふうに否定したうえでレイチェルは言った。「こんな時間に女の子を放置するなんて、それでも男？」
　お前に言われるまでもなく俺は男だ、と反論したかったが、俺はもともと善人なので、送れと頼まれたら送ることに異存はない。それなら最初から自分で「送るよ」と言うべきではないのかという意見があがるだろうが、レイチェルが遭遇するかもしれない危険といち早く風呂に入りたいという欲求を天秤にかけたうえでの行動だったことを明らかにしておきたい。俺はそういう人間である。
　慎也はベンチに放置してきた。むにゃむにゃと眠っていたので、朝の陽射しが差し込む頃には全身汗だくで二日酔いに苦しみながら賀茂川に飛び込むだろう。二日酔いも醒めて身体もクールダウンするからちょうどいい。一連の行動を慎也がとることを願いながら、俺はバイクを東に走らせる。
　レイチェルの下宿は大学西側の路地に面したマンションだった。建物はフレンチトーストのような、白なのか黄色なのかよくわからない色だった。
　マンションの前まで行ってやり、「じゃあな」と言ってすぐさま帰ろうとすると、いつかのように俺の進行方向をふさぐようにしてレイチェルが立った。
「なんだよ」
「ちょっと上がっていって。お酒飲んでるんだから酔い覚ましししないと危ないわ」
　ここまで送らせておいて今更それはないだろう。それに、俺は酔いなど感じていない。万一事故でも起こそうものなら俺の人生が終わるも同然だが、そんなことはバイクに乗って道路に出ている以上、日常茶飯事だ。
「大丈夫だって。それにアルコールはけっこうな量飲んだから少し休んだくらいじゃ消えない」
「じゃあいっぱい休んでいって」
　これまでにもこういう積極的な奴はいくらかいたが、そのなかでもこいつの真剣さはかなり高ランクに入るものだった。酔いに任せた突飛な行動は、男の場合醜いが、女の場合はそう見えない。やはり異性の視点だからだろう。
「じゃあ悪いがシャワーを浴びさせてもらうぞ。それでもいいか？」
　べつに含みを込めて言ったわけではないが、レイチェルが身構えた表情をしたものだから、言い訳みたいに聞こえる本音を言うしかなかった。
「さっきから言ってるが、俺は風呂に入りたいんだよ」
　しばらく俺を見つめていたレイチェルだったが、決意したように言った。
「いいよ、でも着替えはないから」
「それはべつにいい」
　それに、シャワーを浴びたら帰ろうと思っていたのだ。酔っているときにシャワーを浴びると

酒がまわって危ないなんて言う奴がいるが、実際に浴びてみればわかるが非常にすっきりする。頭がクリアになって、飲酒していたという事実を忘れてしまうほどだ。うっかり忘れてそのまま車で出かけて、うっかり飲酒運転で捕まる奴も多いだろうと俺は推測する。

5-2

　女の部屋に入ったことがない、なんて言ったら俺がいかに植物系男子としての責務を全うしているかの証明になると思うが、もちろん俺は入ったことがある。
　要件はさまざまだったが、いずれも相手が俺を招き入れたのだ。俺のほうからアプローチしたことは一度もない。俺は他人の部屋で気を遣うくらいなら、ずっと自分の家のベランダにいたいと本気で思う人間だ。
　レイチェルの部屋は、八畳半のリビングにキッチンとバスルームが備えつけてあった。今時の女子大生にとっては標準装備であるが、男はまだまだここまでの装備は贅沢であるというのが一般的な見解だ。
　標準的な女の部屋と同じく、雑然としていてじつに汚い。きれいに片づいた女の部屋などじつは存在しないという事実を知らないのは、頭のなかがじつは薔薇色である草食系男子くらいである。俺は経験上、この事実については既知となっている。
　さて忘れているかもしれないが、俺は植物系なのだ。一切に興味関心が薄く、規則正しい生活を求め、社会にきれいな色を添えて世間を明るくする素敵な緑黄色系の男子なのだ。べつにナメック星人のように顔色が悪いと言っているのではない。
　だから、シャワーを浴びて服を着てからバスルームを出たところに下着姿のレイチェルが立っているのを確認しても、俺は特になんとも思わなかった。いや、なんともというのは嘘になるだろう。いくら植物系であると言っても、性欲がまったくないわけではない。遺伝子に組み込まれた生殖活動への欲求は、個人の意思では抗えないものであり、それが体現しないとなるとそれは病気か異常な性癖の持ち主ということになる。いずれにしてもアブノーマルだ。そして俺はノーマルな植物系である。
「そんなに暑いのか？」俺はきいた。
「うん、すごく暑い」
「そうかい」俺はリビングに移動してソファに座る。
「何か飲む？」
「コーヒーがあるといいんだが」
　レイチェルはキッチンに置いてあるコーヒーメーカーのポットから出来立てのコーヒーを注いで俺の目の前まで運んできた。どうやら俺がシャワーを浴びている間にセットしていたらしい。なかなか気がきく奴だ。いい秘書になれるだろう。
　ところで相手が暑いと言っているのにコーヒーを頼むとは、相手をさらに火照らせて不埒な行いに手を染めようというのだろうこの変態、という主張が聞こえてきそうだが、俺はいつでも自分に正直な人間である。単にコーヒーが飲みたいだけだ。そろそろ一時間経つので煙草も恋しい。それにコーヒーを淹れたのは俺ではない。
「はい。熱いよ」
「ああ、どうも」
　受け取って一口飲む。濃いめのブラックでとても熱い。舌がしびれて頭が冴える。すでにシャワーで頭はクリアになっていたが、さらに刺激されて身体が火照ってきた。

「うまいな」
「これ小川珈琲のやつだよ」
「へえ」
　小川珈琲は京都市内ではわりと有名だろう。喫茶店の看板にはたいてい小川珈琲の文字がある。
「わざわざ珈琲店の豆を買うとは熱心だな」
「私もコーヒー好きだし」
　私も、っていうのはどういうことだ。俺はこいつにコーヒー好きであることを話した覚えはない。
「いやなんとなく、君、好きそうだなあって」レイチェルは俺の隣に腰掛けた。いつかの立ち位置と同じだ。ささいな相違点はあるものの、基本的な状況は変わらない。
　徐々に俺の肩のほうへと頭をもたげてくる。なんと単純で効果的なアプローチだろう。草食系の馬鹿共はこういった自然な働きかけを学ぶべきである。効果は俺が保障するが、失敗したときに生じる責任まで負うつもりはない。
「ねえ、何考えてるの？」
　またこの質問だ。なぜ皆一様にありきたりな問いかけをするのか。まず、何を考えているのかを説明することがいかに難しいかを理解してから質問してもらいたい。この場合何が難しいかというと、今後の展開を視野に入れた適切な答えを探すのが難しいということだ。しかし、この回答も定型化しつつあるので悩む必要はあまりないのが一般的な認識である。前述で難しいと言ったのに、矛盾しているではないか、という指摘はあえて無視することにする。
　俺は基本的に正直者なので、質問をそのままの言葉の意味で捉える。たとえば「何を考えているのか」という質問の答えは、「ベランダに出て煙草が吸おうと思う」というのが正直な回答である。しかし、これは質問者が意図するところと異なる趣旨の回答であるため、有無を言わさず却下である。
　肉食系男子なら、ここで何か舌がただれて歯が浮くような甘い言葉を呟くか無言のまま行動に移すかだろう。じつに率直で素直な行動である。俺の意見だが、これが正解の回答および行動ではないか。女性の期待に両側面から応えている。一般解としてもっとも選ばれているのがこれだ。つまり、社会はほとんど肉食系男子ばかりであるという証明にもなる。
　草食系男子が流行の兆しを見せているなどとささやかれているが、本当は違うと俺は考える。何が違うかというと、草食系男子は、決して需要のビッグポイントを占める存在ではないということだ。つまり、女性が元来欲しているのは肉食系男子であり、お口直しのために草食系男子をつまむ程度の考えしかないということになる。べつにそれが悪いと言っているわけではない。ただそれが真実だろうと指摘しているだけだ。
　草食系男子のことは、草食系男子を身近で見る植物系男子の俺が一番よくわかるだろう。あんな連中に箸を伸ばすくらいなら、道端の雑草をごま油で炒めて食べたほうがいくらか栄養になるだろう。腹を壊す可能性も非常に高いが、そういった危険を抱え込んでも草食系男子を回避したほうがためになると俺は教えてあげているのだ。

話が逸れて草食系男子たちの非難になってしまった。目下の俺の状況を確認しよう。

- 場所はレイチェルの部屋。ふたりきりである。
- 俺たちはソファに並んで座っている。俺の手にはコーヒーのカップ。とても熱くてそろそろ持っていられない。
- レイチェルは下着しか身につけていない。俺に寄りかかり、期待を込めた視線を投げかけてくる。
- 「ねえ、何考えてるの？」と問われている。
- 俺は現在、このおいしいコーヒーを飲みながら煙草が吸いたいと切実に願っている。

蓄積された現状の課題をすべて拭い捨て、なおかつ自己の欲求をきれいさっぱり洗い落とす手順を俺は頭の中で整理分類し、方程式を組み立てて解を導き出した。

5-3

　時刻はもう午前二時である。
　一切の解決は滞りなく進んだ。現在俺はベランダで煙草を吸いながらおいしいコーヒーを飲んでいる。これは自分で計量して沸かしたものだ。やはり俺のほうが正確無比に絶妙の味わいを引き出す計量ができる。他人は当てにならない。
　俺は自分の家のベランダにいない。窓の向こうではレイチェルが生まれたままの状態でタオルケットにくるまっている。あらわになっている肩が上下しているから、もう寝てしまったのだろう。
　さすがに俺も眠い。しかし身体がまたべたつくのでもう一度シャワーを浴びたい。この煙草を終えたらまたバスルームを借りることにする。
　吐き出す煙が夜の空気に包まれて楽しそうに踊っている。風がないので煙はすぐに霧散することもなく、しばらくそれぞれに手をつないでダンスを踊る。俺はそれをぼんやりと眺めている。
　遠くから声が聞こえてくる気がする。
「おいおい、お前はそれでも植物系を自称するのか？」「誇りはどうした？　じつはただの埃だったのか？」「吹けば飛ぶような信念を掲げて、女を騙くらかしたのか？」「どんな具合だ？」「なぜ貴様のような男が、乙女の寝所に存在できるのだ！」「じつはただの肉食系だろ？」「てか、全然植物じゃないじゃん。肉食べてるじゃん」「許さん」「よくもこの俺を賀茂川に放置して、しかもよろしくやってくれたな」
　まあどれも適切な声だろう。いちいち返答はしない。否定もしない。する必要性も感じないし、そもそも誰が俺に問いかけているのか、わからないのだ。
　世に植物系男子は数いるが、皆一様に俺と似たような生活を送っているだろう。大学生だとしたら、の話である。
　つまり、興味関心は薄いが、それなりにモテてしまう。
　男は激怒し、女は邪険にしそうだが、事実なのだ。
　俺は煙草の火を消して、部屋に戻り、シャワーを浴びた。帰ろうか迷ったが、瞼が重いので、安全の道を歩むことにした。できるだけ音を立てないようにして、ベッドに戻る。暑いのでタオルケットはレイチェルのほうに押しつけてスペースを確保し、俺は横になって目を閉じた。すぐに眠りに落ちた。

6-1

　話し声が聞こえた。
　俺は重い頭を持ち上げる。起き上がってあたりを見渡し、自分が自室にいないことを認識してから時計を見た。八時すぎだ。
　ソファでレイチェルが携帯で話しているのが見える。会話の内容は耳には届いているが脳までは到達しない。よって何を話しているのかまでは理解できなかった。
　俺はゆっくりと腰を上げて、バスルームに向かう。顔を洗い、鏡を覗き込む。少し目の下が黒くなっていた。寝不足のせいだろう。最低でも八時間は寝ないと肌にアブノーマリティが発生する身体なのだ。
　口をゆすいでリビングに戻る。レイチェルは下着を身につけたうえにショールを羽織っていた。あまり大学生らしくない。なんだかお嬢様のようである。そういう育ちをしたのだろう。
「今、慎也君から電話があったよ」そう言って携帯を放ってよこした。どうやら俺の携帯で話していたようだ。
「そうか」
　のどが渇いていた。無意識にコーヒーメーカーに目をやる。ぽこぽこと音を鳴らしながら湯気を上げている。まったく勤勉なキッチン用品だ。
「お前を殺すって言ってた」
「お前はもう死んでいるじゃなくてよかった。猶予があるからな」
　俺の言葉を受けてレイチェルが笑い、コーヒーをカップに注ぐ。俺はソファに座って首を左右に動かした。神経が伸びる音が聞こえる。
　レイチェルからコーヒーを受け取り一口飲む。天上の味がした。
「間違いなく、昨日よりもうまいな」
「朝だからね」
　レイチェルが俺の隣に腰掛ける。人ひとり分の間が空いていた。
「ねえ」
「なんだ？」
「私たちってさあ、何？」
　もちろん人間だろう、などという答えはこの場では適切でない。では何が適切かというと、疑いようのない事実である。
「大学生だろう」
　俺としては満点の回答だと思ったが、レイチェルは不満のようだ。
「よくこういうことするの？」
　なぜ皆こういったシチュエーションで直球を投げてこないのか。必ず変化球である。しかし打ち取る気は満々で、ふざけた態度をとろうものなら次はボウリングの球を投げつけてくる可能性すらある。
「頻繁かというと、正しくないな」俺は正直に答えた。実際、久しぶりだったからだ。
「意外ね、そんなふうに見えないのに。人は見かけによらないって、どっちの意味でも言えるの

よね」
「ところで常識的に、勝手に人の電話をとったりしてはいけないのは知ってるか？」
「さあ、知らない。私常識ないし」
　それは納得である。
「慎也にはなんて言った？」
「べつに。事実を伝えただけよ。私が出てびっくりしてたみたいだけど」
　あいつも意外と肝が小さいのだな。それともやはり意外だったのだろうか。
「俺を放置するとは許せん、刀の錆にしてやるって言ってたけど、私が一緒に寝たって言ったら、生かしておけん、滅殺してやるって言ってた」レイチェルはふふふと笑った。
　前半は冗談まじりだが、後半にはリアルな殺意を含ませてあるのだろう。しかしあいつが飛びかかってきても返り討ちにする自信が俺にはある。
「あと携帯に私のアドレス入れといたから」
　どこまでも自分勝手で常識のない奴だ。
「女の名前たくさん入ってるね。数えてみたけど男の数よりも多いじゃない」
　それは俺が男の連絡先を定期的に消去しているからである。女は消す必要がないからそのままになっているだけだ。ゆえに女のほうが数が多いのは必然である。
「そりゃ気づかなかった」意味もなく嘘をついてみた。
「変な人」
「お前に言われたくない」
「あら、お互いさまよ。私たち、同じくらいだと思うけどな」
　それは認識が誤っているだろう。こいつと俺が同レベルなわけがない。もしそれが許容されるなら、サッカー日本代表だってアルゼンチン代表と同レベルだ。
　俺はコーヒーを飲み干して立ち上がった。カップはシンクのなかに置いておく。
「俺はもう帰る」
「うん、またね。連絡してね」
「用事があればな」
「絶対連絡して」
「だから絶対の用事があればな」
「そうでなくても連絡してほしいの」
　俺は返事をせずに玄関のドアを開いて外に出た。振り返らなかったので、レイチェルがどんな顔をしていたかはわからなかった。

6-2

「お前、アウトローかよ」
「返答が面倒になっただけだ。それにアウトローなんて言葉、公共の場では言わないほうがいいぞ」
　八月の終わり、高野川沿いのショッピングモール地下一階で、俺と慎也は向かい合わせて座っていた。テーブルにはマクドナルドのトレイが置かれている。
　昨日の夜、慎也から連絡を受け、今日ここで落ち合って殺し合おうと言われたときは少し笑ってしまった。少なくとも俺には慎也を殺そうとする理由がないと思ったからだ。
　顔を合わせるなりいきなり殴りかかってきたので、俺はその手を払い、ライターを握った正拳で慎也の額を思い切り突き飛ばしてやった。一階ロビーで吹き飛ぶアクションを演じた慎也にまわりが注目したが、奴は平然と立ち上がり、ぺこぺこと周囲に頭を下げた。そいて俺に近づいてきて「本当に殴るなよ。恥ずかしいだろ」と言ったときに、俺はこいつの連絡先はしばらく消さないでおこうと決めたのだった。
　しつこくあの夜のことについてきいてくるので、俺は包み隠さずすべてを話してやった。妙に興奮しているところを見ると、こいつはもしかして未経験者なのではないか、という予想が俺の中で構築された。奈良にいるという浪人生の彼女も、じつはただの雌鹿かもしれない。
「で、そのあとはどうなったんだ？」今のこいつの目の輝きは、祇園祭の提灯よりも眩しい。
「べつにどうも。バイトで一回顔を合わせただけだ」
「連絡しないのか？」
「用事がないからな」
「お前にとって、恋愛は用事にならんのか？」
「そりゃなるだろう。しかし恋愛関係にあったらの話だ」
「違うのか？」
「違うと断言してもいい。違わないと嘘をついてもいい」
「それは違うってことだろ」
「さあな。受け手しだいだ」
「なんでだよ。レイチェルいいじゃんか」
「クオリティはある」俺は認めた。
「どういう意味だよ」
「要するにこの先どうなるかはわからんってことだ」
「ややこしい奴だなあ」慎也はマックシェイクをちゅごごとすすった。「大学生なんだから、楽しくすごせばいいのに」
「楽しくねえ」俺はテーブルに肘をついて手に顎を乗せた。
　最後に楽しいと心から思ったのはいつだっただろうか。
　こないだのレイチェルとの件か。いやあれは楽しいとは少し違う。しかし、俺の気持ちが動いたというか、根っこをぐっと掴まれて引き抜かれたのは事実だ。だから今の現実があるわけで、俺は物事を前向きに捉えている。

「お前は今、楽しいか？」俺はきいた。
「今ってのは、この瞬間か？　男ふたりで向き合ってマクドを食べているこのシチュエーションのことか？」
「そう捉えたいのなら、質問には答えなくていい」
「冗談だよ。大学生活は楽しいよ」
「大学生活のどこが楽しいんだ？」
「うーん」慎也は腕を組む。「やっぱり高校のときに比べて視野が広がったところかな。こんな都会に単身出てきて、日々を生きてるって実感するのが、なんともいえないな」
　じつに抽象的である。一般に、抽象化は洗練された無駄のないデザインであるべきだが、こいつの解答はぼんやりと気持ちを述べただけで核心の部分をうまく説明していない。その程度の頭だということだ。これ以上きいても意味はないな。
　しかしこいつの姿勢には見習うところがある。少なくとも、今を楽しもうという前向きな姿勢だ。どちらを向いているのかは知らないが、明るく有意義な先を見ていることは間違いないだろう。では俺はどこを見ているのか。
　ひまわりは太陽を向いて育つらしい。だから「向日葵」と書くのだろう。俺はひまわりではないが、できれば明るい未来を向いて生きたいとは思う。植物でも、それくらいの意気込みがあっていいだろう。
「お前はえらいな」
　あの夜放置した件の謝罪の意を込めて、俺は言ってやった。
「何が？」慎也は不思議そうな顔をした。

6-3

　慎也に正直に話したのはあの夜のことのみであって、その後のことについては適当に受け答えをして流した。男に本当のことを話すなど、愚行以外の何ものでもない。じつは女よりも男のほうがずっとおしゃべりなのだ。特に慎也みたいな奴に代表される輩はな。
　アルバイトでレイチェルと顔を合わせた日、休憩室で俺に面と向かって彼女は言った。
「あんたは私の彼氏になるべきよ」
　なんとも不規則な告白である。少なくとも過去にこんな告白を受けた経験はない。俺など告白されたこともないわ！　と憤る馬鹿には耳を貸さない。
「その根拠はなんだ？」
「私と寝たでしょ」
「それが？」これは本当に不思議に思ってきいた。
　すると、なかなか気の利いた爆弾が落ちてきて、俺の目の前で炸裂した。
「エッチした男女はつき合う決まりなの。法律で決まってるのよ」
「いや……」
　言葉にならず、俺はもう笑うしかなかった。本当におかしくて、立っていられないほど腹が痛くなった。
「何がおかしいの？」レイチェルは怒ったように叫んだ。
　小学生のように幼稚なお前の主義主張がだよ、と言いたかったが、代わりの言葉を俺は発した。
「いいよ」
「へ？」
「だから、お前とつき合ってもいい」
　怒った顔が急速に変形し、無の表情になった。思考が停止しているときの人間の顔だ。
　しばらく停止して、たっぷり五秒経ってからようやく絞り出すようにレイチェルは言った。
「もちろんよ、法律で決まってるんだから」
「なあ、それってドラマかなんかのセリフなのか？」
「え？　なんで？」レイチェルは首を傾げる。
「いや、リアルの人間が言う言葉とは思えんから」
「何よ、私が二次元だって言いたいの？　あんたそういう趣味があるの？」
「どういう趣味のことを言ってるのか知らんが」俺は手を差し出した。「よろしく」
　俺の手を気持ち悪い汚物であるかのように見下して、おそるおそるとレイチェルは手をとった。
「よろしく」

6-4

　九月に入ったが、夏はまだ京都の空をすぎ去ったわけではなく、まだまだすごしにくい気候を保ったまま洛中の人々を苦しめていた。
　俺とレイチェルは、下鴨神社の境内である糺の森を歩いていた。天高くそびえるかのような木々が頭上を覆っていて、俺たちをまだまだ殺人的な陽射しから護ってくれている。
「私、外でするのは嫌だから」
　昼下がりの陽気な空気のなかで、どれだけ馬鹿だとこんな発言ができるだろう。こいつは俺が考えていたよりもずっと馬鹿で面白いのかもしれない。
「鬱陶しいから離れてくれるか」そう言って、俺は笑いながら隣を歩くレイチェルを突き飛ばしてやった。
「何すんのよ！」と怒りつつも笑顔なのだから、自分が言ったジョークを受け入れてもらって喜んでいるのだろう。
　ちなみに今日レイチェルと会ったのは偶然だ。そんなカップルがいるかとつっこまれるかもしれないが、いるのである。
　俺は俺で散歩に来た。レイチェルはレイチェルで下鴨神社近くの店の有名な菓子を買いに来た。どこへ出かけるにもいつも一緒なんてふたり組は気持ち悪い。そんなカップルは恋人岬から飛び降りてしまえ。
　しかし、偶然顔を合わせて、異常とも病的とも言える、とにかく気持ちの悪い笑顔を見せるのだから、レイチェルも根っこでは女の子なのだろう。その程度の楽観視ならしてやってもいい。しかし万一こいつが少女マンガの少女化した場合、俺は即座に舞空術で飛び去る構えだ。
　俺たちは境内をうろうろ歩いて、本殿に参り、参道に並べられている木製のベンチに座ってレイチェルが買ってきた菓子を食べた。焼餅と俺は呼んでいるが、正式な名前は知らない。柔らかい餅で粒餡を包み、表面に軽く焼きを入れた簡単な菓子だ。長く京都北部に住んでいる人間なら食べたことがない奴はいないだろう。いるとしたら、そいつは家から出たことがないか著しく社交性が低いに違いない。
「おいしいわぁ。お茶がほしくなるね」
「たしかにのどが渇くからな」
「私ね、こういうのはじめてなの」
「こういうのとは？」のどが渇いたことがないという意味ではないだろう。
「こんな、デートみたいな」
「じゃあお前はむかしの彼氏と何をしていたんだ？」
「聞きたい？」
　いやまったく興味はないのだが、なんて発言は彼氏として不適切だろうか。しかしどうでもいいと思ったのは本当である。
「話したければ言えばいい」
　レイチェルは持っていた焼餅を口に押し込んでそのまま飲み込んだ。噛んでいないように見えたがどうだろう。ここでチョーキングを起こされてもやや困る。たしか対処法は背中をこれでも

かと叩けばいいのだったか。それとも腹を突き破る勢いで殴ればいいのだったか。いずれにしてもバイオレンス溢れる救急救命である。
「私今までふたりとしかつき合ったことないの。それもあんたを含めてね。前の彼は高二のときつき合ってた人で、大学生だった。歳は知らないけど。ナンパされてついていったところで初体験したの。それからたまにメールが来て、ホテルで会って。彼の家に行って。そんなのばっかり。どこにも連れてってもらえなかった。私がどっか行きたいって言っても、彼は忙しいとかって断りの返事ばっかりで。これってもしかして私騙されてるのかなって思ってきいてみたらいきなり振られたの」
　そんな赤裸々告白までしろとは言っていない。しかも話の内容でこいつの馬鹿の程度が俺のなかでさらに強化された。明らかにその男は身体が目当てである。男のほうはつき合っていると認識していなかったに違いない。こいつのひとり相撲だ。ふらふらついていって処女喪失するのはいかがか。というか話を聞くかぎり、こいつにしか問題がない。男には特に責める要素がないだろう。
　さらに不思議なのが、こいつがあまり傷ついているように見えないということだ。男に責任はないと言ったが、一般的な見解として、悪い男に捕まって散々弄ばれあげく捨てられた哀れな少女という像が確立できるだろう。しかしこいつはそれをまるで気にしているふうではない。強いのか馬鹿なのか。俺は後者だと思うが、いずれにしてもこいつは普通ではない。
「それは災難だったな」実際は災難とは言わないだろう。災いは回避できないものであるが、こいつの事例においては充分に回避可能である。
「うん、だから私、あんたに賭けてるの。あんたなら大丈夫だって。ちゃんとしてるって」
「俺のどこを見てそう思うんだ？」
「はじめは容姿が気になって、それでつけ狙ってるうちにいろいろ情報が入ってきていい人だと思った」
　つけ狙う、という表現にいささか恐懼したが、きっかけが容姿であるというのは納得だ。これまでも皆そうだったからな。今、俺に殺意を抱いた奴はじつに正直者である。
「それで話しかけようとしたら逃げられちゃって傷ついたけど、煙草屋で張ってたら捕まえられてよかった。煙草くれたじゃない？　あれうれしかったんだよ。吸うのははじめてだったけど」
「それはすぐわかったよ」
「えっ、つけてたのが？」
「いや、はじめてだってのが」
「そうか、やっぱりさまになってなかったよね」
　火もろくにつけられなかったのだ。はじめてだとわからないほうがおかしい。
「バイト先が同じだったのは本当にびっくりしたの。もう運命かな、なんて思った」
　俺は不運だと捉えていたのだが、こいつはまるっきり逆のベクトルで捉えていたようだ。
「で、あの五山の夜。覚えてる？　私に見る目があるって言ってくれたでしょ？　慎也君連れてきたときは刺してやろうと思ったけど、万事はうまくいったもんね」
　刺す対象は誰のことだろうかと気になった。慎也を刺すなら問題ないし、俺を刺すなら慎也を

楯にするからやはり問題はない。
「ひとつききたいことがあるんだが」こいつの回想を聞いているうちに思い出した。
「何？」
「お前、ギターサークルの部室で何してたんだ？」
「ああ、あれ？」ふふふとレイチェルは笑う。ジャンケン後のサザエさんみたいだ。
「私、天才でしょ？」
　意味不明である。
「何がだ？」
「あのとき私のこと、どう思った？」
　あからさまに態度が悪くてつっけんどんで意味不明で、もう会いたくないと思えるほどに鮮烈な印象を抱いて、ああ、なるほど。
「俺はお前がよくわからんよ」
「えぇぇ、どういう意味ぃ？」レイチェルが甘えた声を出した。
「聡明なのか、馬鹿なのか」
　またふふふと笑う。そして俺のほうに寄り添ってきた。
「それを天才っていうの」
「そうかい。ところで暑いから離れろ」
　俺は右肩に当たる小さな頭をぐいっと押し返してやった。首をふらふらと振りながら、「うーん」とレイチェルが唸った。

　俺は暑いのを我慢するのと煙草を我慢するのを天秤にかけ、たっぷり五分悩んでから下鴨神社を出た。境内を出て南へと歩いていくと、鴨川デルタが目の前に広がる。陽射しから身を護るものがないにもかかわらず、河原では読書をしたり寝転がったりしている人間が散見された。皆一様に京都の夏を受け入れて満喫しているようだ。
　俺たちは木陰になっている石のベンチを確保し、腰を下ろした。俺はさっそく煙草に火をつけた。
「私も」
　てっと差し出された手に煙草とライターを置いてやる。レイチェルは流れる動作で煙草に火をつけた。
「上達したな」
「こんなの誰でもできるでしょ」
　つい先ほどまでさまになっていなかったと反省の色を見せて殊勝な態度をとっていた人物と同一であるとはおよそ思えない横柄な態度である。
　煙を吐き出しながら耳を澄ませてみた。川の流れる音などまったく聞こえない。周囲の喧騒がやかましすぎるのだ。特に交通による騒音がひどい。ミニ四駆に乗り換えてくれれば静かでいいと思うのだが。
　飛び石を渡る子供の姿が見えた。小学生にも満たないだろう幼児が数人、ぴょんぴょんと飛び渡っていく。ところどころに亀のかたちをした石があって、幼児のひとりが亀の頭に水をかけてやっていた。
「あれ、俺もむかしやったよ」指をさしながら俺は言った。「亀石って呼んでた気がする」
「亀石さん？　どこにいるの？」
「いや、もういい」
　ときどき話が通じない。サッカーだといっているのに、こいつはパスを手で拾い上げてしまうのだ。結果ハンドとなり、ゲームが中断する。
　では勘違いできない話題を振ってやろう。
「なあ」
「んー？」
「お前、名前なんていうんだ？」
「……」
　黙ってしまった。俺のほうを見ようとせず、ぷかぷかと煙を吐き出すのみである。
「言いたくないのか？」
「べつに、知らなくても困らないでしょ？」
「まあ、困らんが」
「第一あんた私のこと名前で呼ばないでしょ。まだレイチェルとも呼んでもらってないもん」レイチェルはぐっと俺の顔を睨んだ。
「そうだったか？」

「そうだよ」
「まあべつにどうだっていいじゃないか」
「じゃあ私の名前もどうだっていいわけね」
　うまくかわされてしまった。しかし筋が通っているので、反論できない。
　少し変化球を投げてみる。
　俺はなんでこんなことをしているのだろう。きっと退屈だからだ。
「前の彼氏はお前のことなんて呼んでたんだ？」
　まさかレイチェルと名乗っていたということはないだろう。やり捨て大学生も立派な大人である。妄言を吐く馬鹿な女子高生に構うほど、性欲処理に困ってはいないはずだ。
「名前、呼ばれたことなかった。ていうか、教えなかった」
「じゃあレイチェルか？」まさかとは思うが。
「ううん、友達の名前を騙ってた」
　意外とあくどい奴だ。何かしらの問題でも起きていたらどうするつもりだったのか。まあ女子高生だから、仕方がないのかもしれない。偏見かもしれないが、女子高生の頭の程度は、普遍的高校生の知的レベルよりも格段に下だ、という考えの俺である。
「なんでそんなことを」
「だから、名前を言うのが嫌なの」
　ここまでひたむきに隠されると、さすがの俺も気になる。やってはいけない、と言われたらやりたくなってしまう子供の心情である。こいつの名前が禁断の果実に思えてきた。
　さて、どうやって聞き出そうか。実力行使という手段がもっとも有効かつ実際的である。つまり、こいつの財布を奪い取って、学生証を拝見するのだ。奪い取っておきながら拝見とは、言葉が正しくないようにも思えるが、禁断の果実は誠実に取り扱わなければいけない。それを手に入れるためには、いかなる暴力的施行も正当化されるのだ。
　あるいはもっとソフトに攻めてみるか。俺も暴力は好まない。女性に対象を限定した話だが。男など、簀巻きにして清水の舞台から叩き落としても心は痛まない。いっそ清々しいくらいだ。
　ソフトな攻め方とは、どういうものが有効か。やはり精神攻撃にかぎる。
「なあ」
「何よ」
「名前を教えろ」
「まだ言ってる。しつこい男は嫌われるのよ」
「そうだな、嫌われてしまったか」
　俺は背伸びをして、立ち上がった。煙草を携帯灰皿に仕舞う。
「残念だ」
　レイチェルは、俺の様子をぽかんと眺めている。諦めのよさに感心しているのだろうか。いや、むしろ怪しんでいる表情だ。
「じゃあな」
「ええっ、どうしたの？」慌てて立ち上がってきいてきた。

「いや嫌われたから帰ろうと思って」
「はあ？」
「俺が嫌いなんだろう」
「ちょっと待って、何言ってるの？」
「もう会ったりしないほうがいいな」
「何よ、もしかして拗ねてんの？　名前言わないから？」
「いや、興味を失くしたからだ」
「なんでそうなるのよ、待ってよ」
「何をだ」
　レイチェルが俺の腕をとってきた。「わかったわよ」
「何がわかったんだ」
「名前言うから」
　まだ攻める前だったのだが、あっさり陥落できた。この程度で根を上げるということは、つまらない意地が先行していただけなのだろう。本当に興味がなくなってきた。
「いや、べつにもういいけど」
「よくないわよ！」レイチェルの声が少し裏返る。「なんでそんなこと言うの？」
　危険である。こいつがではなく、俺がだ。
　つまり、名前だけでなく、こいつ自体に興味を失くしかけている。ヒステリックな人間には、面白い点などひとつもない。とてつもなくひどいかもしれないが、こういう思考の志向性が、植物系男子を自称できる確固たる証拠となるものだ。
　もう禁断の果実など、本当にどうでもよくなってきた。採取して食べたいと思えない。
「じゃあこうしてよ」思い詰めたようにレイチェルが切り出した。俺の腕がぐっと握りしめられる。
「どうするんだ」
「交換条件」
　条件だと？　しかも交換で？　こいつは自分の立場がわかっているのか？
　いや、何も言ってないのだから、わかっているはずがない。
「名前を言うから、嫌いにならないで」
　それでは交換条件として成立しない。もう果実はほしくないし、べつにこいつのことが嫌いなわけではないのだ。ただ、そのへんで寝転がっている女子大生と区別がつかなくなったという程度の話だ。
「あのな、べつにお前のことが嫌いなわけじゃないし、名前を言いたくないんだったら無理しなくてもいいぞ」
「ううん、本当は聞きたいんでしょ？」
「いや本当にもういいんだけど」
「いいから興味を持ちなさい！」
　そんな言い草があるだろうか。どんな親でも言わないだろう、子供に対して「興味を持て！」などと。こいつは俺の親ではないし、赤の他人である。しかし、現時点では、一応彼女という体

なのだ。それに、今の発言はちょっと面白い。
「まあ、そこまで言うのなら」
　ベンチに座りなおすと、レイチェルは財布を取り出して、なかから学生証を抜いた。
「写真、変だけど」
　べつに写真はどうでもいい。俺のも変だ。なぜか、学生証の写真はセンター試験の受験票と同じものが使われている。教務部のずさんさが見てとれる。
「どれどれ」俺は学生証を受け取り、氏名の欄に目をやった。
「ん？」
　一瞬、読み方がわからなかった。最近はやりの、奇をてらった名前のようだ。
「これなんて読むんだ？」
「そのまま」消え入りそうなレイチェルの声。
　そのまま読むと、
「くっっ」
　俺のなかで、何か閃光のようなものが走った。

情景が頭のスクリーンに映し出される。
どこかの池だ。
大きい。どこだろう？
宝ヶ池か？
水辺に何かいる。
白い。
あふあふしている。
翼をばたばたと。
首が伸びる。
くちばしの黄色いカラーがアクセントだ。
そう、まがうかたなき。
「あひる」無意識に、俺の口からレイチェルの名前がこぼれ出た。

　人間、本当におかしいと声が出ないものだ。誰でも経験があるだろう。
　あの絶頂感。
　こみ上げる思い。
　息苦しさ。
　どうしようもない無力感。
　しかし、
　それらすべてを擁して許す、
　愉快さ。
　彼女は俺の隣で学生証を握りしめていた。うなだれて、表情が見えない。もっとも、今の俺には何も見えない。視界からの情報がシャットダウンされている。同様に、すべての五感も。
　かろうじて、俺が生きている証を示せるのは、「ひっ」としゃくり上げる声だけだ。もうこの状態に堕ちてから、すでに二十分は経過しているだろう。時計をたしかめる余裕はないが、「ひっ」の数から計算するに、それくらいだろう。
　そこからまたしばらく時間が経ち、俺はようやくまともな人間としての呼吸ができるようになった。それまでは、走っていて他人と正面衝突したときに鳩尾をしたたかに打って呼吸ができなかった状態に等しい。
「ふう」
　俺は深く息を吐き出して、煙草に火をつけた。うまく吸えるだろうか。
　横から手が伸びてきた。そちらを見ないで、煙草とライターを渡してやる。隣でライターがカチッと鳴る音が聞こえた。
　煙を吐き出すと、ようやく平常に戻った。煙草には現実回帰の能力が備わっているようだ。
「これで、あんたはもう金輪際、私を嫌いになれない、なってはいけない」
　低い声だった。地獄の底から、いや、池の底から必死でバタ足しながらひねり出したような声だ。ちょっと鳩尾が痛くなったが、笑いは堪えた。
「ああ、なれないな」
　なんせ、生涯にわたる大ヒット作を聞いてしまったのだ。これを上回るネタなど、俺がこれから百年生きようと、お目見えできないだろう。
「当然かつ必然だけど、誰にも言ってはいけない。言うと、口が祭縫いされてしまう」
「裁縫できるのか、器用なつば——」言いかけてやめたのは、脇腹に正拳突きをくらったからだ。「冗談だよ」
「名前に関する冗談の一切を禁ず。言うと、同様に口が祭縫いされてしまう」
「わかったよ」
　できれば選挙カーの上に立って、大音量のスピーカーを通して「俺の彼女の名前は『あひる』だああ！！」と洛中全土に報告したい。しかし、そんなことをすると、口が祭縫いである。あるいは、俺がアヒルとつき合っていると勘違いされかねない。
「言わねえよ、俺もその程度の分別ならあるさ」

「絶対よ」
「なあ」
「何よ」警戒心むき出しで、彼女はこちらを向いた。
　伝えたい、と思った。これまで、誰か他人に対してここまでの思いを持ったことがなかった。だから、言葉にするのに、今まで使ったことのない筋肉、神経、心情を総動員して、勇気を出した。
　俺は、正直に自分の気持ちを打ち明けた。
「お前、最高だよ」

植物系男子の日常 -I love boring life-

http://p.booklog.jp/book/23996

著者 : Kyoji
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/ireadforpleasure/profile

発行所 : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/23996

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/23996